

團告

(毎月補助金に付)

本誌全國各停車場待合室備付に對し其舉を賛し毎月補助金を
申込まれし奇特家は左の如し

岡山 久城茂太郎殿
姫路市 中村福七殿
東市 中藤金太郎殿
神戶市 齋藤金太郎殿
吳市 木村孝殿
品川市 大島良太郎殿
岡山市 篤信會幹事殿

千葉縣内左の各區本誌購讀料集金の義今般左
の各師へ依囑候間何卒諸師の内へ御拂込被下
度願上候也

第三教區 長生郡押日來光寺 山田日廣師
第四教區 全郡澁谷行光寺 前田日應師
第六教區 山武郡清名幸谷東光寺 草切榮玉師
第七教區 全郡御門妙善寺 飛山日甫師
他教區は追て依囑人名報告可致候
明治三十六年三月

統一團發行所

御斷り
本號は記者用の爲め編輯相をくれ發行遅延の段平に相謝し申
候

一本誌代金不納の諸君は至急御送金ヲ乞
一雜誌交換 寄稿共移轉先へ願升

一本誌は毎月一回十五日を以て發行期日とす
一本誌は一冊八錢十二冊前金八十六錢廿四冊前金一圓七十錢郵券代用は一割
増但五厘切手を其とす
一購讀申込の節は住所姓名を階書にて認めらるべし
一爲替局は淺草區北松山町として御振り込の事
一本誌は別に領收書を發せす但し領收證を要する向は返信料を封入するべし
爲替振込の節拂渡濟通知料貳錢を振出郵便局へ納付すべし
一廣告料は五號活字廿七字詰每一行金八錢なり

明治卅六年七月十五日印刷發行

發行人 井村恂也
編輯人 山根顯道
印刷所 鈴木暉學
北澤活版所

東京市淺草區南松山町四十五番地

統一團

統一

第百號要目

- 本誌百號略歴史……………記 者 窪田純榮
- ▲統一の第百號を祝す……………本多日生
- 統一第一百號の祝筈に臨みて本團の旨趣及び前途の施設を述ぶ……………はなぶさ生
- ▲統一百號の歌……………金山猪人
- 柳下談片……………本末等史
- ▲究竟庵雜記……………關田佛城
- 日蓮大聖人(第十回)……………窠堂散史
- ▲人壽百歲……………村上貞藏
- 同盟會三顧問に呈す……………糸 葉
- ▲夏の夕……………高田日暢
- 慷慨錄……………海老澤乾樹
- ▲救濟の舟……………記 者
- 中央統一團友會概況……………記 者
- ▲京都、岡山、和氣、各所通信……………數 件
- 顯本專門夏季講習會……………會 報
- ▲統一第百號を祝せる時、和歌等……………數 種
- 和氣清風……………長谷川庄

明治三十六年八月廿五日發行統一團第百號 每月一回十五日

祝統一百號

長尾成島般舟

異	誰	教	堂
論	決	海	々
百	正	董	統
出	邪	孤	一
世	黑	專	破
紛	白	在	魔
々	分	此	軍。



統一第百號

本誌百號略歴史

振りて願れば過る明治二十九年中、各宗綱要編纂委員の理不盡なる四箇格言の削除は、はしなく佛教界の大訴訟を若起し久しく睡沈せりし宗教界に對し一大醒覺を興へたり、この訴訟は頓て道火線となりて幕府數百年來壓迫に忍びたりし、日宗折伏の元氣一時に爆發し、法廷が決をさけて、訴を却下せんとするや、茲に日宗の志士は相結んで妙宗統一團を起し、盛に法義を鳴して教戦を挑む、是れ法廷上の訴訟の戦を教理上の戦に移したるなり、換言すれば遺矢の戦が一騎がけの闘と變じたるにて各宗と日宗との眞に實力の競争舞臺となり化したる也、爾來統一團は各方面の運動を採りて教戦を張る、「統一」は即ち其れが戦闘に従事せる働の一なり、而して其歴年足を跨ること八年今や漸く百號に達す、戦争好果日に我にありて「正義は最後の勝利」の實を擧げつゝあり、見よ統一團旗擧以來の戦利の反映也

(1)

- 一日宗門下の活力を實施したりし事
- 一各宗教日宗一門に對し漸く重視せる事

- 一紀念大會を生める事
 - 一宗徒大會を生める事
 - 一日宗專門夏期講習會を生める事
 - 一日宗各派合同問題惹起の事
 - 一日宗各派宗學時代に復舊の事
 - 一各宗之れが反響をうけて又宗學時代に復舊せんとせる事
- 右の如きは統一旗擧の餘利と云はざる可らず、而して今本誌一紙上に見る所の過去八年間に於ける顯著なる活動の事蹟を語らんか

- 一統一團設立
- 一教家政客連合大運動
- 一統一團各地支部設立及大活動
- 一格言遵奉會設立
- 一法華宗國友如淡氏對淨土宗青田節氏筆戦
- 一眞言亡國論問答(本多日生氏對上品密範氏)
- 一堺市統一團と全佛徒と衝突
- 一清洲眞雄氏と釋鳳連氏と筆戦
- 一京都各宗協會最後の追難
- 一各宗協會瓦解
- 一廣島教戦(顯本法華宗對念佛)
- 一大阪統一團活動
- 一北越法戦(眞宗對秋原内藤氏)
- 一顯本法華宗々名公稱
- 一正法護持會活動

- 一盛岡顯正會及千葉縣顯本講活動
- 一顯本法華宗中國布教會設立
- 一京都法戰(小高日唱氏對井上政共)
- 一此經難持法戰(小林日至氏等對井上日也氏)
- 一播磨顯本法華宗對各宗法戰(各宗對本多日生氏等)
- 一三秘問答(田邊善智氏對本尊究會)
- 一大阪法戰(大阪統一團對井上)
- 一自我俱樂部運動
- 一取足立聖園若日連大士(小倉豐三郎)
- 一覺王殿ニ對スル顯本演說
- 一顯本法華宗と興行派との對抗
- 一顯本對興門問答(本多氏對阿部慈照氏)
- 一富士派主義滅亡論告式
- 一津山法戰(耶蘇教と顯本)
- 一佛敎篤信會設立
- 一倫理研究會設立
- 一迷信排斥及風俗改良運動
- 一僧俗同信會成立
- 一各地開宗紀念會
- 一布田藥王寺本尊改正
- 一連正會活動
- 一本化中央青年會活動
- 一統一顯本南雜誌合同
- 一高等宗學院設立
- 一佛耶二教の衝突(千葉町に於て)

一大阪宗徒大會
大畧斯の如くにして右は活歴史として將來永く記存せざる可らざるものあり、過去八年間人生の七分の一にあたるべしと雖、長遠たる無限の時間に對すれば唯是れ一刹那の短きに過ぎ、而も事業は着々見るべきものありて決して空過の時代には非ざりき、嗚呼統一出生已來の過去は愉快なる活動を實現したり、吾曹は統一が歩行すべき未來の歴史が、より多き花あり味ある大活動を生みて、長しへ光明を放ちつゝ統一實現の時世は入らんことを祈り且つ禱するもの也

統一記者一覽

主筆	本多日生	(は、年代順)
主任	野口義禪	
全	關田養叔	全
全	松尾忍水	全
全	上田實正	全
全	山根顯道	全
全	松尾忍水	全
全	關田養叔	全
全	古定賢正	全

統一初號已來熱心執筆の勞ありし諸君は

- 小林日至君
- 清瀬貞雄君
- 小川日豊君
- 鈴木曄學君
- 田邊善知君
- 今成乾隨君
- 清水梁山君
- 高田日暢君

統一紙上法戰及運動の報告をもたらし給ひし諸君

- 増田 聖道君
- 原田 容廣君
- 池川 眞應君
- 其他諸君
- 野老乾壽君
- 故國友如淡君
- 村上貞藏君
- 能仁事一君
- 山名木信君
- 萩原啓門君
- 内藤智厚君
- 廣部永真君
- 木村乾中君
- 山田榮殿君
- 大橋會定君
- 能仁諱明君
- 日比野觀義君
- 土屋眞容君
- 小高日唱君
- 龜崎日惠君
- 其他諸君

統一紙上錦飾の榮を得し諸君

- 藤崎通明君
- 石渡日紋君
- 故天羽南翁君
- 故森田信祐君
- 石井光躬君
- 清瀬常隆君
- 森川寛行君
- 窪田利兵衛君
- 保江重君
- 中川觀秀君
- 山田一英君
- 伊藤憲供君
- 影山謙二君
- 窪田貞二君
- 横山南山君
- 松平五峰君
- 森安日觀君
- 成島般舟君

統一を補助せられし諸團體

- 正法護持會
- 僧俗同信會
- 同山信會
- 中國布教會
- 連正會
- 盛岡顯正會
- 倫理研究會
- 自我俱樂部
- 格言遊奉會
- 京阪界統一團
- 各地統一團
- 千葉縣統一團
- 詩佛會
- 教文會
- 千葉町立正會
- 其他諸會

統一初號よりの主要なる目録

後數頁目下之天説誌

(記者曰統一團長本多日生師及團設立最初よりの事務は通せる井村梅也師共に関西に遷せられ容子に暗きものせもが取調べたることにて此列記名以外に案外盡力せられし諸君之れあるべしと思考す若し斯の場合は一忠告を賜はりたし)

格言事件時評	統一國主義綱領宣言書	伯爾光輝君に對する書	念佛宗評	四箇格言稿(結語)	佛敎界大同盟四箇格言を讀む	訴訟提起に就て	第一番の判決を論ず	統一國主義	佛敎各宗協會を打撃して各派一統の事に論及す	陳所見而問政治家之意見	日蓮大聖人の智慧	佛敎各宗協會編纂委員の義務を論ず	全世界に於ける宗教統一の氣運	被召の答を讀む	日蓮各派相俟りて以て統一大學林を設立すべし	日蓮大聖人	佛敎各宗協會長及各宗團要綱編纂委員の行爲に對する可なり	經王樓底の迷悟	統一主義に就て	四箇格言論本論	淨土家の宗義に對する質問狀	全上に對する答對書	佛敎の實踐に就て	格言問題の壯觀	法華宗と念佛宗	格言事件の大書簡へ上告したるに就て	念佛宗の風貌	

顯本の編纂	小 林 日 五
青田氏の書評に對する謝函攻撃	西 山 道 人
佛敎主義を論ず	今 成 乾 龍
佛敎各宗協會及びその時局	本 立 院 日 雪
統一國主義綱領の時局	本 立 院 日 雪
青田氏の答對に關する謝函攻撃	本 立 院 日 雪
宗義の二分	本 多 日 生
法華宗の信心	本 多 日 生
淨土家の宗義に關する謝函攻撃(敬謝)	本 友 如 法
右答對書	青 田 龍 節
金 剛 行	釋 天 慈 龍
佛敎各派統一論	釋 天 慈 龍
我所思我 所感	本 多 日 生
日蓮聖人を信する歴史的觀察	本 友 如 法
節刀を懸つて諸宗迷悟の首を切る	本 成 乾 龍

(未完、次號續載)

統一の第百號を祝す

窪田 孤松子

壹の單數より百の複數を改めば實に妙しとせず、倘し千或は萬の數より願れば又多しとすべからず、統一が呱呱の聲を舉たるは實に明治三十年にして、而も窓前の梅花雪を貫きて笑へども、開谷の黃鶴は未だ春を告ざるの時なるを覺ふ、爾來屈指すれば春秋を閱すること千七周、號を數ふること將に壹百を以てす、蓋し多しとすべけんや少しとすべけんや、千の數萬の多きより之を比況せば、或は其妙なきを想ふべ

しと雖、此の少なき時間と僅かなる號數とに於て、我統一が大聖日蓮の御教を宣張し鼓吹して、日本佛敎界の濁流を廓清せんと謀り、以て天下國家に貢獻したる功益の、如何に饒多にして過大なるものあるや、千萬證者の風に諒知する處なるを信す、此の光榮ある統一は今や百號を重ねんとす、吾人は竊かに既往の歴史に溯り冥想し來れば、轉た追憶の情に堪ざらしむるもの、實に二三にして止むらざるものあり、さきや之より筆せんか、吾人は茲に他日を期せんことを約すべし、然れども我統一の敎界に産れ出たるは、そもく如何なる宿縁によつてか、少しく之を語るの要あるを想ふ、

過る明治貳拾陸年佛敎各宗の管長は、諸宗の宗義を蒐輯して各宗綱要を編纂せんことを協定す、之に由つて當時の日蓮妙滿寺派は、其本載せる處の宗義を鮮明に叙述し、本宗綱要と命名して之を各宗協會に提出せり、然るに編輯長高地默雷の一派、此の綱要中より四箇格言及び法華嚴誠の二題を、恣まゝに剛却し抹殺せんと試みたり、是則ち統一が産れ出たる其遠因なるを諒知すべし、

斯の如く統一は大聖日蓮が主張せられたる、四大格言の擁護と三大私法の妙法とを、字内の蒼生に廣布すべく産れ來りて、今尙我々として其針路を歩み、頗る健全に發達の道程に上りつゝあるは、吾人の踊躍歡喜に堪へざる處にして、豈百千萬の號數を重ねたるを祝するの要あらんや、實に統一は前途遠望にして未來永劫に亘り、世界の宗教を一妙法に統合し、富士山嶺に妙法華經の大旗を樹立し、雪白異色の人類と異口同音に妙法を唱誦して、喜びの潮を本門の本尊に捧ぐ

る時より、吾人の祝賀を願ふべき機に到達したるものと謂ふべし、人或は誇大の言と語るものあらん時、或は未だ妙法運華經の眞價を認識せざるの答なりとす、

然れども我統一が數海の指針を以て自から任じ、終始一貫の主義を把持して居て、大聖日蓮の御教を助顯し奉らんことを欲し、千艱萬難と戦ふて紛々とも今や百號に達す、吾人が將來に實現せしめんとする大理想の、其遠序として茲に福隆の熱誠を發表し、統一萬歳萬々歳の祝辭を大呼三唱す、嗚呼海の内外に如布せられたる幾億萬部の統一、見聞觸知の輩ら此の一大妙因によつて、悉く皆菩提の直道に近づける其功其徳、算數比喩以て稱計すべからざるなり、

吾人は一日史を按ずるに、若し國主の御意あらば念佛をも申べしと謂ひ、念佛無間と申す類は經釋は之れ無しと書せる族あるを見たり、此の輩何れの宗派に屬せるや今は之と謂はざるべしと雖、我先師不惜身命を以て任じたる英傑、常樂院日經は四大格言擁護の爲、幾多の迫害法難に接して身は遂に不具となりて、其偉勳を今日に遺して宗史に光彩を發たしむ、又近き過去に於ては顯本法華宗の綱要中に敘せる、其四大格言は各宗敎徒の忌憚に觸れて、遂に法戰敎陣となりて彼等を感伏せしむ、嗚呼顯本法華宗と四大格言、其四大格言と本門三秘の妙法、若破若立は之れ法華經の一大綱格、前に明晰なる主義の下に古今一貫せるものと謂ふべし、

此の天主教大理想を抱持せる我統一は、倍々進んで目的の實地に達せんとす、豈百千萬萬の化城に披息し止息するものならんや、先づ小より大に及ぼし多より一に歸せんとす、幸

ひに上は佛祖の加被を賜ふあり、下に幾多同志の翼賛を爲すありて最後の勝利を期せんこと、宛かも掌中に握れる荏羅菓の如し、聊か所感を叙して統一の百號を賀す、

祝統一百號

林 日法

如何に世間の學が進歩するとも如何に學士博士が増益するとも我輩の本大本尊を一同に尊拜せしめざる内は決して世は文明と稱す可らず學士博士とは云ふべからず何となれば壽量原本の實義を知らざる内は根底なき文明根底なき學者なればなり宗祖の壽量品を知らざる諸宗の學者畜生に同ずの金言宜なる哉然り而して「統一」は原本の實義を知らしむる教導なりされば以來益々盛大世人をして速に正法實義に歸着せしめられんを祈る所也

「統一」の百號を祝す

品川 天民子

若し夫れ青森地方以外に饑饉ありとせば現世會人類に於ける信仰心の饑饉なり道徳の終る所是れ宗教の始まる所にして宗教は道徳の上により道徳の粹是れ宗教にして宗教は信仰に依て立つ
噴水は水溜の平面より高く登ること能はざる如く所謂倫理道徳ては噴水は信仰の水溜なくして噴水するの理あらんや現世會斯の水溜を飲めば道徳心の枯乏となり信仰の大饑饉となる世人爲に空腹の結果失望して無神論の淵に投じ或は信じて往々聞風を加ふる邪義迷信の毒水を呑みつゝあるなり斯のときに當つて眞理益々

却つて呼ぶ是れ惡魔の聲と
遂に彼れ魔の本性を現じ
佛使日蓮を迫害す

大難四箇及無數の小難

さはれ大磐石の法師
動かんや水火何物
切れ、突け、梵爾たり
身輕法重死身弘法

壯美たり魁せる大法將の姿

續く二陣三陣の若黨原
日親あり日經あり日與あり
天下の權も理なきには腹ざんや
一天四海皆歸妙法の天職あれば

果然日明治の天地統一の旗

七百年潛みし叫びの聲
之れは是れ衆生救済の爲也
將に搖がんとす、百號の旗を振れば

明瞭なるを得べし眞信仰のマンを興へて失望者を制し邪義迷信の毒水を呑めるものも魚示して飲喜と満足とを興ふるものは吾が敬愛する「統一」なりとす今や是のマンを供給しつゝある「統一」の同數一百號に滿つると聞く吾等讀者たるもの豈に一言の祝意を送らずして止まんや
オ、「統一」よ永遠に存在なれ而して饑へたる者をして饑饉饑饉せしむる大責任は今や唯り汝あるのみ冀くは自愛せよ

統一百號の歌

はなぶさ生

嗚呼偉哉釋迦の兒日蓮

生を東海の安房に享け
大父の遺命之奉じ
諸種の謬論之を正し
末法萬年の暗を滅せんとす

聽け！盡十方に轟き互るその聲

我法獨一の成佛なるよ
念佛か、彼れは無間
禪か、彼れは天魔
眞言は亡國、律は國賊也と

嗚呼驚す天地の群魔

現身にそはす闘戰慄つのみ

「統一」の滿一百號を祝ひて

南山道人

嗚呼東洋の佛敎國 原本妙法の華の國
六百餘歳の春ふけて や、鐘へ行く法の華
それが雷の「統一」は 清き響りを放ちつゝ
七歳の春を迎へけり 開宗六百五十の聖年に
美花は東都にはこるべり 今年に浪花の公園に
國はしき花は咲きにけり いまの雷のその枝は
西の都にまどちかし 來る年春の眞中には
やびて大花は開けなん 咲きはてし花に結ばん實こそ
如何なる効果を奏すらん 法の華さく都なる
妙花開度の知國に 美風の香氣散はんとて
たつめる人やいと多し 色香美味の雷なる
宇宙を色む「統一」は 色、に重なる一百號
げにも尊と我が國の 花の雷の「統一」の
兩百號を壽きて 且つは行く末さく事を
御本尊にと拜跪して 一心合掌唱題し
祝へ同胞三百萬 祈れ兄弟三百萬

祝統一百號發兌

原田容廣

もいふけよのよはいろうれしけ禮
千ちよ萬つのはつ音なりせば

統 一 西野 靈 妙
幾筋の小道に迷ふうな見を
すべてひとつに教へ導く

同
日の本に教への文は百書なれ
こと國までばかりしられず

同
法の 鼓
時の來て法の鼓の音高く
こと國までも鳴り響くらん

同
法の 教
うへもなき法の教へをさとりえは
はこる心に月やすむらん

同
統一の百書を祝し待りて
窪田 利 兵 衛

同
百のよわひの教へなりけり
統一の正論日に隆大なるを祝し南松山町に
よせてよめる

同
千代八ちよ文のはやしはつらぬきて
いやさかをゆく南松山

同
法の鼓、天然自然鳴
自からなりしつゝ美の聲きけは
いける佛に逢ふこゝちする

同
成 應 道 交
飛をさす法のつゝみに我のまは

同
統一の百書を祝して
白井 日 照
めてたくも百をよび四る統一の
なほいろまきる今日の福は

同
祝統一百書
小 谷 流 人
無始無終この世のつぎひ世まで

同
妙のみ教へ歌へこのふみ
同
悪鬼夜叉鬼神もくしきなひかせつ
早もよせを迎へつる哉

同
秋季の題によせて祝す
孤 松 子
祝ばはや先何よりも生身魂

同
統て皆譽ぬ人なし揚花火
つなりされども月は澄渡る
百東を教へては習知にけり

同
祝統一百書
小 谷 流 人
號衣度勝負のあるや花角方

同
けんはんと聞く荷やもゝの遊
百日の苦勞見ゆるや牽牛花

統 一 支 義

『統一』第一百號の祝筵に臨みて
本團の旨趣及前途の施設を述べ

(明治三十六年八月九日品川妙國寺に於て)

本 多 日 生 師 口 演
山 根 顯 道 筆 記

本日の會合は、雜誌統一の百號紀念の爲めに開きました次第で、豫て統一紙上に公告せるが如く、統一主義を奉せるもの、懇親を重ね、尙ほ且つ前途の發揚を期する爲め、一日の清遊を催した譯であります。此炎熱焼くが如き酷暑の折柄、遠路御來會ありし諸君の熱心に對し度んで多大の敬意を表します。

就ましては、先刻今成君より開會の趣意として、統一主義の眞理たること及び時代の必要上、是非共我々同志者の今一段勇奮せざる可らざることを演られました。自分更には本團創立の趣意と今後の施設に就て、少しお咄して見様と思ふのである。先づ創立の趣意に就て申すれば、日蓮上人の宗義の解釋は

申迄もなく佛教統一の大理想より出で、此理想を實現する爲めに強義折伏の大方針を立てられたのであります。斯様に上人の大方針は折伏にあることは無論であります。茲に注意すべきは、其折伏なるものが單に戰を以て正義を擴張するのみにあるか、若くは最後の目的戰に終らずして、敵をして悉く降伏せしめ、依て以て統一の美菓を結ばしむるにあるか、此點が注意を要する問題であります。自分は思ふに、折伏は決して止むべきものにあらざりて、確かに勝つべきもの、所謂諸の邪魔障礙打勝て、芽出度統一の春を見るべきものであると確信するのである。それで、其統一主義に就ては、明治廿三年に發刊した宗義講究會誌に於ても、既に自分の理想は發表して置いた事を記し居ります。此講究會誌は宗義上に於ける自由討究を許したので、畢竟内外の宗教家が未だ十分の論究が足らんから、宇宙の大統一を發見する事が出来ないので、此欠點を補ふ爲に雜誌を發刊したのである。而ばならず其當時内外共に日蓮上人の折伏を誤解して居りましたから、自分は進んで此大折伏の眞意義を社會に紹介すべき考を持って居たのであります。次に各宗綱要問題の如きも唯敵を非難攻撃するのみの態度に出たのでは決してない、敵をして正義の旗下に屈伏せしむべく大統一の爲めに、敢て宗祖唱導の四個格言を祖述したのである、處が編纂委員の氣宇狭く識見陋劣にして之を拒みし爲

め、由々敷格言問題と云へる大問題を突發しせむるに至つたのである

で、統一團報は此格言問題を動機として生れた雑誌であり、すが、統一團其ものは、其すつと已前より成立して居るので、今は古人となられまし、天羽日讓と云ふ能筆の手をかりて、淨寫せられた統一團主意書なるものが今猶ほ團の文庫に保存してあります、斯く統一團は相當に永き歴史を持って居り、まして結團の前後に於ける當時は一萬千里の勢を以て多數の賛成者を得ましたが、爾來の経過は如何と云ふに、或は其速力の比例を持つて居ない感があります、されど諸君決して失望する勿れ、時代は確かに統一主義を欲求して居ると思ふ

一例を挙げれば、日宗各派の學者有志者と稱すべき人々の從來の態度は、他と大に戦ふべく決心を以て、分裂的に各々其教義を研究せられつゝありしに、今日は全く其態度一變して、何れも共通せる點を研究せらるゝ様に成て來た、是は學問研究の態度の上のみに見た實例ですが、此研究的統一即主義の統一のみならず、更に大に事實上の統一を欲求して居る、昨年開催せられた開宗紀念大會、宗徒大會、さては宗友會の如き、何れも其証左であります、で斯る宗門の狀態を來した事に就て、我統一團は確かに與て方あることを誇る事が出来るのである

夫から今一つ茲に新らしき研究を要する事があります、其は

非日蓮主義の者流は、此大方針を誤解して居るので、唯何でも戦つて、戦に勝んどののみ、其一部面に丈非常に熱中して全局の圓滿に就ては何等の考慮も持て居ない、これでは迎も其望み通り勝ち能はんので、よし偶々勝つたとしても、毫も社會を益することなきのみならず、却て社會を害する結果となりて仕舞ふ、例せば單に未來主義のみに偏して現世を忘れたるものは、非常の害惡を社會に貽すと同じ事である、それですから眞實に積極主義を主張するものは、天下を取て代る場合に、圓滿に成功すべく大なる考慮を要するので、此考慮なきものは、決して眞正なる日蓮主義とは稱することを許されないのである

或人は云ふに、應病與藥であるから、病が劇甚ある丈うれれ劇藥を投せなければならんと、斯様に申しますが、日蓮上人のは斯る對機的の折伏ではなくて、根本的に圓滿なる大折伏であります、是は是非共御記憶を願て置たいので、譬は自己が足のみ満足なから迎、其手の不完全なるにも氣付かず、敵の足なきものと、ひたふる足のみの戦を挑むとすれば、それは決して充全なる勝利は得られませんが、足も手も目も耳も、四伎五身總て完全圓滿なる身体を以て、ろうして足なきもの手なきものと戦はなければならん、其處が實際上新らしき研究と設備を要すべき點なのである

日蓮の主義は、千古萬古に互りて變りはありませぬ、が右申

此統一主義に就ては、右様單に日宗各派のみならず、他宗の側からも其必要を叫び出して來た様に思はれる、即ち帝國大學の博士學士中にも、近頃頻りに統一の二字を筆舌に弄する人が出て來ました、斯様に内外呼應して機運は正に順熟して來ましたが、茲に新らしき研究を要するのは、其統一に就て積極的統一主義と消極的統一主義の二大別がある事を知らなければならぬのである

積極的統一主義とは、大なる主義の下に他の小さきものを統合すること、語を換へて云へば、整備圓滿なる大主義の下に、他の不整備不圓滿のものを折破伏從せしめて、綜合統一するの義であります、消極的統一主義とは、他の議論を破らさず、他の惡き方面は其儘そつと打捨て、置て、其よき部分相似たる部分を啓發迎合する、所謂其共通點を發見して、其に統一あることを説明するやり方であり、此方は畢竟根本の大真理が未だ定かに認知せられて居らぬので、彼村上博士の佛教統一論と云ひ、井上巽軒博士の宗教の契合點を論せられたるものと云ひ、悉く此第二の消極主義に外ならぬのであります、で、我々は此二點に於ける理非得失を研究することの、極めて必要なるを確信するのであります

無論、日蓮上人のは積極的統一主義の大折伏であります、が併し其積極的折伏は、殺す爲めにあらずして活す爲である、纏める爲めであると云ふ事を注意しなければならん、或似而

す如く、時代の要求に對する吾人の責任として、大に研究を要することと思ふ、尤も自分は寧ろ研究と云ふよりも、之に就ては纏りたる意見を持って居りますが、茲處二年か遅くも三年の後には、結束して天下に發表する考であります

次に、日經上人の事歴をお咄して見様と思ひますが、上人は御承知の如く、宗門中興の大折伏家でありまして、又統一の大抱負を持って居られた方である

で、近頃帝國大學に於て、大日本史料の編纂をやつて居られまするに就まして、慶長三十四の兩年に跨れる史料に名高き、所謂慶長宗論なるもの、實相を、種々に手を廻して取調べられた處が、淨土宗の方は有力の材料が段々出て來ました、即ち常樂院日經の袈裟だの、京都の各本山、關東の六ヶ寺、身延の住持等から其の當時徳川政府へ差出したしした請書即ち『念佛無間は釋經に證文無之候』の書付だの、それから日經の消息、并に日經より奉行に宛たる書面等、随分と有力な材料が出て來ましたに引換へ、法華宗の方は之を打消す程のものが何もない、處では丸で法華宗の敗北の様に見えるが、まさか當時の事實はもうでも無ろうと、編纂掛に於て公平に之を扱はれ、随分と入念に取調へられつゝあるもので、尤も御承知の通り我國には、歴史として完全なるものは殆んど無ひと云てよい有様で、水戸の大日本史と雖も、未だ以て完全とは云ひ難ひ、开處で先年辨慶は無ひの、楠正成はさうの、日

蓮上人龍口法難は嘘だの杯と、例の抹殺博士が一時世の中を騒がした様な譯で、今度の編纂事業は斯る欠典を補ふべく随分と綿密な取調方で、後世に貽すべき大事業なれば、大學に於ては井上哲次郎博士之が主任となり、四十余人の學者連全力を注いで從事せられて居る、實に空前の大事業である、編纂掛の人々よりは、法華宗の方の材料を取敢ず池上へ照會せられた、處が池上には何も無い、是は無以等で、池上の方は其當時關東六ヶ寺の筆頭と成て「經釋に無之」の請書を出した連中だから、どうして「反證處の譯でない、仍て同寺からは自分の方へ其取調方を申越された様の次第である、斯様な譯で、若し此際之を打消す材料が無つたならば、慶長宗論は全く以て法華宗の敗北と云ふ事になつて仕舞て、將來拭ふべからざる宗門の大耻辱となり、且つ先師苦心の効勞を水泡に歸する次第で、實に容易の事でない、依て自分は此事を聞くと同時に、井上博士及び掛りの人々へ度々面會を遂げて色々打合せをなし宗門の各部面に向て右慶長法論に關する材料蒐集に於て、今尚ほ全力を傾注して居る様な次第で、集り來れるもの數十點の多きに至りました、本日書院に陳列して諸君の觀覽に供し、尙ほ且つ先期開會に先ち、山根君をして其必要の珍什數點を朗讀させましたが、是は皆自分の手より大學に提出した一部分なので、本日一日丈大學から借て來て、諸君遠來の厚志に酬ひた微意である、此他にも澤山有

と成たのである、如何に暴戾の政府にしる、若し此時禁止令を布たならば、七八百の弟子檀那を有する日經あり、日經にして一度其門徒を率ひて天下に其非を鳴らしたならば、如何に萎縮せる他の宗徒も、或は其呼號に應じて奮然として起つものもあろう、斯くては天下の大事となりやせんと思ひ直して遺憾ながら禁止令を引込ましたのである、僅か一人なりと雖も、大決心を以て立てるものは強いものはない、うれは殺せば死ぬる、死ぬるけれども……切れば死ぬる、死ぬるけれども……大精神の鬱結せる處、其抱持せる主義の突發は、天下を席捲するの勢を持つて居る、是れ禁止令の中止せられた所以であつて、又宗門一縷の命脈を繼ぎ得て、千古萬古遺として聲あるの大活劇なのである

それで又此事件が重大な問題であつた事は、徳川十五代中の記録にも委しく出て居ります、宗論と云ふよりも寧ろ政事上の大問題であつたのである、夫は其問答に立合つた人を見ても分る、則ち家康公及秀忠將軍を正座として、高家六人、執權八人、町奉行二人、判者高野山頼慶、立會淨土宗賜紫沙門四人、各宗列席者十八、相手増上寺廓山正譽上人（此人の好悪なる事は大學の掛りの人々殆んど驚かれ居る位の人物なり）助手大蓮寺了の相向、問答場所は江戸新城……斯様な大業な仕組である、時の政府としては、實に政事上の大問題として取扱たのみならず、宗門に取ては日蓮上人の積極的折伏

志者から提出せられて居ますが、大學の預り證が直接其御本人の手元へ在りますので、本日諸君のお目に懸る都合に行か無つた譯である

それで、段々材料が本宗から出て來ますので、大學でも日經上人の事蹟が次第に明瞭に成て來て、此等材料は悉く印刷になる事であるから、愈出來の上は随分美々敷事になるのであろう、さて亦是が愈出版の曉、は顯本法華宗の外他の日蓮宗の側は、お氣の毒ながら不名譽の事に成であらう、それは少し言はねば分りませんが、元來家康公は、大の念佛者で、先天的法華宗を厭嫌した人で、例の切支丹并に不受不施禁止の法冷を布き、數百人の流罪死罪をも出た人である、斯く法華宗の折伏を嫌惡せる家康であるから、腹の中では法華宗禁止を斷行したいのが山々だが、中々の老練、表面の形式を粧ふ爲めに、問答とさすとか書付を取るとか云ふ、廻り遠き手段を取つたので、爲に慶長宗論と云ふ歴史を今日に貽したのである、さて首尾よく「念佛無間の法門經釋に無之候」の書付を取上つた後、若も此際日經微せば、徳川の政策知るへき事で、經釋になき念佛無間を云ひ募る法華宗沙汰の限りと云ふので、禁止令の出るは火を見るよりも瞭な事である、然るに幸にして、剛骨日經上人のあるあり「念佛無間の經釋に明に有之候」と正反對の書付を呈出したので、流石の家康も呆然に取られ、如何とも詮術なく禁止令が沙汰止み

主義の興廢に關する大問題であつたのである、次に其請書の真蹟を自分は過日大學で見來ましたが、關東の分は池上を筆頭に六人、京都の方は妙顯寺を筆頭に十二人外に身延日遠のが壹通、以上三通ありませ、こうでありませ（此時講師白墨を持って墨板に之を書す）

仰下之旨、欽承候、念佛申墮、地獄申名、經釋、中證文無之候、祖師任所立之義候間、御前可然様、御披露所仰候、恐惶謹言

百三月六日 妙顯寺 日衍判
本 滿寺 日乾判
外十ヶ本寺連名

板倉伊賀守殿參る

關東の方は「無之候」の下が「任祖師之義」と變て居まして、極月十一日（慶長十三年甲辰）池上日經外五ヶ寺連印に成て居ります、身延の分は三月十三日（百年辰辰）と成て居ります、處で後には此請書中の義の一字が非常の問題と成た、それは斯である「經文に證文無之」と書ても抱はんではないか、證文はなくても義が有るからと、斯様な屈理窟を以て日經上人を冤や角非難するものが、本宗中に其當時から有て、而も此正邪の兩流が爾來一進一退して、兎角に抱はんと云ふ方が勢力を占めて居たので、身延池上等一致派の側は、無論其屈

理窟の魔風に吹き捲かれて仕舞て居たのであるけれども、大學の人達ももう云て居る、其時代はそんな紛はしき事は決してない、證文なしと云ふたなら、無論其時代では大敗兆である、其とは臆病風に浮足の立た宗門はまけおしみにそんな屁理窟を後々加味して来たので、一致派杯では今尚ほ此臆病風の浸染の爲めに、足腰の立んものが大部分を占めて居るのである

然るに本宗は何處に傳はるとなく、之に反對せる所謂積極的大折伏の精神、微かながらも傳り來りて、終に今日の如く統一主義の發展と成たのである、ですから數百年間妙滿寺の歴代より除てあつた日經上人をば、去る廿二年の宗門大改革の當時、自分共有志者は、肅んで加歴の式典を舉行し、贈位をもなした次第である

一寸茲處で次手に、身延日遠上人の事歴に就て一言申述たいのは、御承知の通り日遠は「國主の仰せならば念佛をも申すべし」と云ふたと、啓蒙日講杯から大變に未練者臆病者との彈阿を受けて居りますが、日遠の考では、理窟の争ひなら兎も角、暴力にはたまらん、まゝろんな奴には、柳に風が上策と云ふ量見で有た様に思はれる、是は可察ことで、此時の「へこたれ」方は、今日の様な「へこたれ」方とは違ふ、現代日蓮宗の様に、骨の無ひへこたれ方では決してないと思ふ、それは段々と取調べると分りますが、此問題の起りし最初は、各

宗証惑の有様杯、逐一講話ありしが、筆記者俄かに胃癆撃を起して、暫時筆を抛ちぬ、讀者乞ふ聞報九號を參觀して、其意を咀嚼あらん事を希ふ)

彼様に此文書を子細に熟讀したならば、其當時の實際はよく分ります、とりわけ最後の一段に、經師の抱負を見る事が出来る、所謂統一的の大抱負であり、其大抱負と其から謗法顯示筆端書の内容、それをば委しく論じたいと思ひました、今日は最早時間がありませんから、何日か又改めてね咄する事に致します、尤も筆端書中雜亂勸誨排斥論がお認めに成て居ます、是は今日でも正邪兩黨のある事ですから、是非御承知置を願ひたい(此時講師筆端書を手にして、兩酒井の佛法法離の有様を朗讀し、問々注釋を加へらる)

諸君どうか今後益々奮て、圓滿に此統一主義の發達に盡されん事を希ひます、勿論我々一世には到底皆歸妙法の域には達しません、夫は分り切て居ります、何もうんなに急ぐ事はありません、と云てやらなければ少しも進みません、其處は諸君のお手加減にありませ、方針さへ立つて居れば、將來屹度成功するのであります、是て本日は閉會致します

筆記者白す、此講演ありし翌々日、講師は東播磨石園乗寺に於て開催せる關西顯本法華宗夏期講習會の招聘に應じて出發せられたれば、匆忙の際講師の校閱を経る暇なく、其儘印刷に附しぬ、若し誤謬あらば、其責筆記者にあり、讀者請諒焉

本山の貴首は何れも大本尊の裏へ「請書は決して致間敷候」と誓紙を書たものである、然るに後に至て之を破り、どうく請書を書て仕舞たので、此事を日經上人は非常に辨難して、本尊を欺く大罪人と論じてある、それは謗法顯示筆端書の三ヶ條の中の一ヶ條である、けれども其反面より見れば、幾分察すべき點が有て、今日の様を骨抜給的墮落てない事は分て居る、是は公平に批評すべき事と思ふ

右様の次第で、日經上人にも請書を書けと強ひた處が、上人は九て正反對の「念佛無間と申す法門經釋に明かに有之候」と書たのだから、家康公の赫怒其絶頂に達し、從て上を見習ふ下ですから、滿目悉く日經の一身に蟬り、駿府御所の召喚、江戸への轉送となり、諸宗の學者或は今少し御手柔かにとなだめ、或は卒爾にて候と御詫候へどすかし、其他手をかへ品を換へて經師を説つけたが、經師は斷々乎として應じなかつた、其事は先刻山根君が朗讀しされた經師一期之法難でも分りますが、尚ほ一番よく分るのは、經師の隨身日允の筆になれる文書で、此文書は京都五條坂上行寺の什寶に成て居りますが、今度はまだ大學へ呈出の都合に成て居らん、自分は格言問題の當時、本山上行寺からかりて寫取りました、統一聞報第九號に掲載しました、それを序を順ふて梅簡單にお咄申さしよう(此時講師統一聞報を手にして日允の文書を一節宛朗讀し、此法論の顛末、政府壓制の度合、淨土

各面評論

柳下談片

團末 金山猪人(寄)

藤村某の華嚴投瀧は種々な觀察上から、凡そ掲げられない新聞雜誌はありませぬ、其兎角の批評がありませぬ、私には同情の一人で、寧ろ宗教の必要を世人に紹介せん爲の救ひの權化ではあるまいかと迄思ふので、それまでなくとも信者を誘引するには此上もない好適例の題であるには相違ありません

藤村某が投身してから俄に華嚴の瀧は繁盛するうてす、中には引續いて投身する人を罵る聲が八ヶ間敷ありませぬ、しかし人の死ると云ふことは余程のことてありませぬ、死は人間の極點なりとしますれば死るものも面白くて投身するのにはありませぬ、之も要するに如何に世間の人々が宗教の靈水に飲みて、死に至るまで激しく之を要求して居るものと見ねばなりません、あながち死ものを馬鹿ものとのみ罵しつ

て、ろして宗教家の義務は済だものではないと思ひます。
念佛無間論は從來重に浄土宗に向けて居りますので、日本最大の勢力ある真宗に正面に當つて居ない感じがあります、清水梁山氏の近著浄土真宗論は此憾をふさぐことが出来るであらうと思ひます、

師子吼の木村成明氏、どんな人か知りませんが私は全氏に對し少なからぬ尊敬の念を懐つてをります、私は木村氏の教義上の是非は暫らくをきまず、私は顯本法華宗の教義を無上のものと確信してをりますので、此意義に立つて見ますれば木村氏には限らない、どんな有名な人でも主義を異にしてをるかざりは難有くはありませぬ尊敬の念を拂ふの必要もないので、私が木村氏に對し尊敬の念の芽すと云ふのは
一六十一にもなれば隱居がたい當世に不挽不屈熱心に主張をしてならる事
一 一宗の機關としても發行したい雜誌事業を能く繼續してをらる事
一 齊藤、北條、花山、鴨羽などの諸氏が篤く師事せられて居らるゝ風は唯に何處かに佳い處があるに違ひない

こんなものであるが、私はあながち縁もゆかりもない木村氏の提灯持はする必要はない、詮ずる處大寺の御前さまが利慾の經費をなさるゝ當世、勢これに與せざるを得ないのであります

日宗のソウサンドとは何方なるかは知りませんが、毎度料理よき手加減を拜見して居ります、全紙二八二の火曜日だよりなどは余程面白く讀みました、此君の如き皮肉の珍品の筆は宗門の第一流でありませしよ、私は思ふので、どうか斯の如き筆で今少し廣き方面の舞臺に現はれて頂きたい、宗教界にも一人の線雨は欲くあります、各宗のがわに此馳走を振舞て欲しいのです

清澤滿之氏は生前少しも威張た人ではありませぬ、けれど故人となられてから如何に其生前の徳が發揮しましたか、精神界ばかりではありませぬ其幾多の新聞雜誌が傳ふる所の氏の徳は、假令主義は異にして居りませしよとも襟を正して讀むべきものがあります、人は自分から大將がるのは他には頗る脈氣なものですが、清澤氏のやうに死した後でも其徳をたゝゑらるゝやうにありたいものと思ひます、

清澤氏の遺教と云つても宜いほどの『予が信仰』はあまりに應へ力がありませぬ、それでも人は黙讀するうですそれを以ても如何に時代の人か信仰の要求をして居るか、了りませ

田中智學氏の本化妙宗式目三千條と云ふが内覽より離れ早く世に發表せられて、我々を益せられんことゝ、木村成明氏の佛家革命正法論が速に現れて人心を潤さんことを活目し

日宗の加藤氏と師子吼の齋藤氏との法義上の始末は何方づくのてすか、齋藤氏のは師子吼第拾六號て之を了しました、加藤氏も貴重な法義上の問題として一度之に應じられたるからには漫然放任せらるゝ様なお方でないことを知つてをります私等は法義問題の衝突が頓て解決せらるゝことを樂に俟つ一人てあります

師子吼と云へば、フンあれかと鼻てあしらう風が見えます、現に各雜誌上にチラと其様子を見受てをるてはありませぬか、皆相手にせないと云ふ風です、なせ斯であるかと思ふに悪口が過ぎる、馬鹿にかみつくと云ふ一點てありませしよ、しかし可もなき不可もなき欠伸多き宗教界には此點が特色を放つては居ませぬか(真いとは申しませぬ)凡そ宗義に篤くなりませれば多少此傾向はある筈です、安國會なり我顯本法華宗なり其の傾がありませぬか、之の善惡の判断は果して何れなるか別問題として、茲に師子吼に一言を呈するのは假令日蓮上人が諸宗の堂塔を焼き拂へよ、諸宗の僧の首を由井ヶ濱で切れよと仰せられたにしろ畜生に同すと云れませしよ、時世が相離れて居るとすれば先づ人身に互る等は少しくお手やはらかにあされて、更に教義上の方から大々的挑戰がありたいのであります、(齋藤氏の全紙十六號掲載の加藤氏に送られたる書は眞面目の文と認めます、私はどうも加藤氏の返し矢を拜見したいものです)

て俟つて居ります

宗教文學

日蓮大聖人 (第十回)

佛城 關田 養叔 講演

比叡山は、西北の方は山城國愛宕郡にわたり、東南の方は近江の國滋賀郡に跨り、その絶頂をば四明嶽と申しまして高く雲の上に聳へ、遙かに見下ろせば、愛宕高嶺の山々は箱庭の築山の様に直ぐ眼の下に落ち、鴨川大井川淀川の流れば銀の糸を張つたやうに見へ、琵琶湖の水は鏡の如く脚の下に望まれ、風を孕んで走る帆船は浮囀の遊戯に似て、山水の風景の佳いこと實に云ふに云はれぬ有様で、其れのみならず、松や杉の類は森々として天にも達くばかりに生ひ茂り四隣もの静かにして、佛法僧を囀る鳥の聲いと情く、梢にうよぐ風の音は天女の音楽かと疑はるゝばかりである、堂塔伽藍は薨を列ねて高く聳え、昔し傳教大師が此の山を開かるゝ時に『阿耨多羅三藐三菩提の佛たち我たつ所に冥加あらせよ』と詠み給ひしことも思ひ出されて尊ぶとく大恩教主釋迦牟尼世尊が法華經を説き給ひし天竺の靈鷲山、天台大師が法華

開頓の大法と説かれたる唐土の天台山も斯くやと思はれ、三千人の學僧は各々智解を凝らして三學の窓に眞如の月を詠め學問修行の盛んなること驚くべきである

比叡山は名僧智識の製造場とも申すべきで、淨土宗の法然上人、眞宗の親鸞上人は申すに及ばず、此の外立派な僧侶と澤山出して居ります

運長師は大に喜び「我れ此の山に學問修行の功を積んだならば、甚深微妙の佛法も底を盡し、一世の大願も成就するしあらず……」と、これより頻に勉學の外餘念も御座いませぬ

比叡山を開いたる傳教大師と申すは、近江國滋賀郡に生れ、名をば最澄と云ひ、行表和尚を師匠として佛法を學び、後唐土に渡つて、かの天台大師六代の法脈を傳へたる道遠和尚に遇ひ、天台宗の教義を相承て日本にかへり、桓武天皇の御歸依を得詔勅を奉じて、この山を開き、日本國に初めて法華宗を弘めた元祖である、うれてすから、日蓮聖祖を法華宗を弘め初めの時には傳教大師門人と名乗られたることもあつた、尤も内相承と申して本統の教義の方からいふと、同じ法華ても大邊に相違があるのですけれども……うれば兎も角も、當時この山に留りて佛法修行に心を注がれたる運長師、自ら佛法に於て見定められたる見識と、傳教大師が「あきらげくのちの佛の御代までも光り傳へよ法の燈」と詠まれたる御精

神とは、昔と今と時は距つれども、肝膽相照らすといふ關係があつたのである、

されば日蓮聖祖が學問修行に於て、見聞と博くし自ら信ずるところを愈々強くしたのは、比叡山に於ける十二年の間の學問である、また此の當時の佛法の廢れたる世の有様を憤りつゝ、且つは大に人物を鍛へ上げたのも此の山でありませぬ、叡山の學寮といふのは、東塔、西塔、横川といふ三つに分れて居て、之を三塔と申しますが、運長師は間もなく東塔の圓頓坊といふに住職をいたし、大に天台一宗の奥宗を尋ねんと、法華經等の諸大乘經を讀み、天台、妙樂等の祖師がたの釋論を見究め、その外、傳教大師己來、支那天竺より將來れる幾萬の經論に眼と晒し、日々講堂に昇りては、三塔の學者等に専ら親交を結び、取り分け淨明、經海、心賀、政海、心聰、尊海などといふ當時三千の學衆の中に於て頭と呼ばれて博學の譽れ高き人々に立ち交り、日に月に經論釋書の談論に餘念も御座りませぬ、

或る日、例の如く講堂に昇りませすと、上座に扣へて居たる講主より「法華經と大日經との差別如何」といふ問題が出た、すると並び居たる大衆は、各々智辨を振つて議論を闘はした、時に運長師は、席を進み出て「愚按ながら拙僧もの申さん、法華經は釋尊の御本懷にして眞實の經文、一切諸經の王で御座る、大日經は方便の權經にして法華經には遠く及びもつか

ぬもの、されば何れが劣り何れが勝れたるかを較べるのは、日月と螢と光りを争ひ力士と赤子と力を較べるも同じこと、二經の差別、今さら論ずるにも及ふまい……」と、滔々と爽かなる辨舌を以て、一々に經文の證據と擧げて論じますれば、一同の大衆は、悉く耳を傾けて聞いて居つた、運長師は尙も憤慨に堪へざる容子にて、更に語を續き「抑も大日經とは眞言所依の經……惜ひかな當山の法水は慈覺大師に至りて全く眞言の泥に濁り果て、了つた……昔開基傳教大師、

天台法華の旗を翻ひして、南都の六宗をば勇ましくも、桓武天皇の御前に於て打ち破り、六十餘州の寺々山々、悉く我大師に歸伏し大に一乗妙法の光りを輝かし給ひて、御弟子の眞眞、圓澄は如法に其跡を守りたるに、慈覺といへる獅子身中の蟲湧き出て、弘法の眞言に泥み、果ては理同事勝などど謂はれもなき邪義をいひ出して、玉と瓦とを一緒にし酒に酢を交せて法華と眞言とを混合して、あはれにも權實雜亂の山と爲したのは、誠に淺ましき事では御座らぬか……」と満堂の大衆を睨んで一々に條目正しく述べ立つれば、一同はあつたけに取られて暫くは語葉もなくシーンとして宛ら水を打つた様で御座います

講論が終りまして、大衆の中に列つて居つた兼ての學友尊海の坊へ運長師は俱に連つて参り、親しく交際中であるから互に打ち解けての物がたりに「慈覺が師敵對を爲して、傳

教の清き流れを濁したるばかりでなく、今は一山の學風悉く斯る邪義に陥つたるは何んたる有様であるか、未だ一人として此の淺間しさを憤りて、流れも清き傳教大師の昔しに換さ回さんとする眞の佛弟子は居らざるか……」と運長師が語に力をこめて物語れば、尊海は唯俯くのみにて答ふべき語もなく心のうちに密かに運長の見識の高いことを驚嘆するばかりであつた、

夏 旬

丹鳥一つ九十九里濱暮れとす
木屋町は夏の宿也青すたれ
白蓮華卷葉をろえし風情かな
運によせ何語るのか乙女等は
朝顔に日の出のさまを覺へにき
わつさだけうまさ氣によふ眞桑うり

米 汁
同
水 人
同
い 同
同

學察の朝起覗く蓮見かな
 早稻晚稻美濃も近江も青田かな
 氷餅祝麥湯をうへてうちわ哉
 子めらがやついてにむしる青鬼灯
 寒氷ほめる言葉や心太
 夏たびや岩間の水に腰をのべ
 耳塚のいはれ聞はや昔の花
 蓮の香や今道心の腰衣
 體に紀みい時の忍ばれし
 秋はまだ隣のさうなこかね虫
 山の上や山またさつく雲の峰
 夕顔の花に家内を呼び出しぬ
 雲の上に集ふ弓矢や雷の陣
 暑さ日の餘りを夜の往來かな
 難波には澄月さうな涼みふね
 すたれをば越へて來たのか火どり虫
 青うりの横にむしるの涼みかな
 青馬風の音さへきけて月涼し
 鷺艸や沼田を走る雨の脚
 利過る表具の糊や雲の峯

米 同 水 同 水 同 米 同 水 同 米 同 水 同 米 同
 汁 人 と 人 汁 と 人 汁 と 人 汁 と 人 汁

夏の夕 糸葉女

土もさくべき天つ日は
 西の山邊に落ち行きて
 椎の木影うすれきぬ
 遠く聞ゆるひぐらしや
 入相つくるかねのをと
 たへなるしらべを合すこと
 静けさひいさをつたへつゝ
 いる日はまたかくれけり
 しばふにいかふわが袖に
 夕風にほふ池の面は
 いつうもれけん白蓮の
 にごりに清くすみはたる
 あふげば空に星幾つ
 くしき光を放つなり
 たるれば水に黄金なす
 玉かあらぬかきらめけり
 またいぐうちに幾千の
 光りはましぬゆめのこと
 なぎさにうよぐ藍の葉の
 互にひめごとさへやけば

救濟の舟

海老澤乾樹

蓮の上に星の露

慈悲のあふるゝみ佛の
 深き無量の妙法を
 つとふる如くかゝやさぬ

縁り瀟たる森の露
 舞いゝれる葉の戸を
 浮世を隔つしるしこや
 幽に清けきこの精舎

住むその主はそもやたぞ
 ●●●○○○
 長は垣のあさかほに
 露の命を慰さめつ

夕は香華さゝけつゝ
 唱ふ妙法蓮華經
 道友時に訪くれば
 説やひめしす法の道

暑熱の肌をなやませば
 月影清く流れ行
 谷の川邊をさまよひつ
 雲間をわけて御公

血になく頃や夢圖し
 やよ以何なれば汝はまた
 いくも氣高く清らかの
 聖の道を修するかし
 ●●●○○○
 此の世の様を觀すれば
 煩惱の風荒にあれ
 五欲の焰さかんなり
 榮華にこゝろ奪はれつ
 知るや知らすの桐一義
 散り行くことのうからずや
 嗚呼なまけなの此の浮世
 濁りたりな此のこゝろ
 一念こゝに及ひては
 汝れが行ひなつかしく
 辱さおしへしたわるれ
 △△△▲▲▲
 いてや滾れし此のむくる
 よし千歳の末までも
 妙の御綱に法のかじ
 救濟の舟にみまかせつ
 生死の海や渡らなん
 吹ませや鷺の山風
 菩提の岸に到るまで

紅蓮白蓮

究竟庵雜記

本末等史(寄)

○近頃思想界で割合に入ヶ間敷ものは彌陀中心説を標榜せる村上博士の佛敎統一論と哲學的一面にて人生を解し得たりとする新著述たる黒岩氏の天人論と今一つは大悲觀に沈みたる結果華嚴の瀑壺に投身した青年哲學者(?)のうれとてあらうこれらの事柄を一々法華經的眼光を放つて透し見る時は頗る趣味ある問題となる

○少し文字のある者は無闇に天人論々々と援き少し佛敎を生嚼りした者は統一論に驚き又少し思想界に頭をツウ込み居るものは連に投身者を罵々と批評する有様ナント面白いとはなしか

○統一論は成程大著述である學者的の緻密な研究である爾前づりの佛學者信佛者杯には余程面白く感ずるも無理はないが聖祖も『智者學匠ノ身トナツテモ地獄ニ墜チナ何カセン』といはれた如く成佛得道の法は釋迦の本意を失した學問的研究ではトテモ得られぬのであるこの書の日蓮宗を論ずる所を熟讀せば蓋し疑團は氷解するのであらう

○華嚴投身者の問題は世間の批評の根據が局部に偏して居る様に考へられることは哲學と宗教との調和をさへ了したなれば何の疑もないのである畢竟本師佛の大悲願海に遊び『不可解』を『可解』とするは法華の純信にあるのは理在絶言である『法華をしろものは世法を得べきか』の聖諭と玩味するがよし

○天人論ころ二十世紀の最新思想を以て裝來せる奇書なれとの噴々の時評があるけれど少しく佛敎哲學を研鑽せる人は敢て驚くことはないのてある只科學的説明の精緻巧妙なのは西洋の秩序的説明式を襲用した効てあらう佛敎最高の日宗哲學に比較する時はまだ至らぬ所があるなほこの書は單に哲學一面であるから不満足な點はまぬかれぬ

○生々の思想や向上主義は確に眞理であるるけれども三大秘法を度外視した説明は血も涙もない乾燥至極の宇宙論となる聖祖が哲理的宇宙佛身論のみに甘んじ給はずして能者たる智徳圓滿の佛身、所者たる九界を説き示された眼光には驚くべき渴仰の念を生ずるのである

○世界の廣き年代の長き幾多の宗教無數の哲學が興起したけれどともいづれもこの重要な哲學的方面即理性と救濟的方面即情的との調和が完全に出來て居らない故に我等が依止處として心身を委かすのに足りなかつた、佛敎でも彌前述門ではまだなか／＼この深秘の大眞理が顯はれて居らぬ

聖祖が『釋尊因行果徳ノ二法ハ妙法蓮華經ノ五字ニ具ス我等コノ五字ヲ受持スレバ自然ニカノ因果ノ功徳ヲ讓與ヘ給フ』と出世一大事たる觀心本尊鈔に示されて居る釋迦中心論の基礎に立てる法佛關係の大活案は聖祖をおきて他の論師人師の企て及ばぬ所であるげに宗教の大安心、宇宙の説明はこの數言につきて居るのであるナント平易でしかも深い説明式ではないか可尊々々

○聖祖顯本の大義を信するものは紛々たる世塵に穢されず開目鈔にのたまひし『智者ニツガ義破ラレズバ用イジトナリ』との大抱負大信仰を奉持し『萬里ノ波濤ヲ蹶テ宋ニ入ラズトモ諸經ノ勝劣ハコレ知レルナルベシ』の大見識さへあらば日々夜々涌き出る所の諸問題に對し利刀をもて爪を割くが如く炳焉として少しも迷惑するものはない本佛本師の大智慧を借り奉る故に得安穩樂である南無

人壽百歲

蓮堂散史

人生僅に五十年七十古來稀なりとし、喜の字米字を數にあて、ろが長命と健康を祝するは人生に於ける美事は美事に相違なきも、吾人ば更に進て人壽百歲を主張せむとす、人壽の百歲、これ不能の説にあらず、上古の歴史を窺ふに、百歲は愚か、

その以上に生命を保維したる人蓋し妙しとせず、况びや醫術衛生の進歩せる現世紀に於てをや、されど人壽の増減は、世切の變遷に伴ふて長短ありとし、これを心靈界の作用によるものと認定せば、人壽百歲を主張するに就て、研究すべきは心靈修養にして衛生の根本義なることを、道破せざる可らず、願ふに、健全なる國家は善良なる國民の品行にありとせば、品性靈養に至大の干繫ある宗教の正邪を闡明にすべきは、素よりその所也、されば佛祖釋迦牟尼といひ、聖祖日蓮と謂ひ、心血を救世に澆きたるも、この靈光を發揮せむとするに他ならざる也

墮落せる人類は、迷信の惡魔に誘引せられて自己の靈體を、自暴自棄せる結果はうの餘毒を、子孫に遺傳せるにあらず哉、この贈物は、單り子孫の迷惑而已にあらず、總へての者の迷惑也

この故に、聖祖は迷信邪法を對治せむために立正安國の妙音を唱へ、これが救済に努められたり、聖祖日蓮が執政者に獻じたる立正安國論は、日本國家の寶典として國民の必讀すべきもの也、國家救済の妙音たる聖祖の立正安國主義は諸法の源泉たる顯本の妙法より出てたり、聖祖は顯本の妙法によりて、正邪を判定し各宗の誤謬を指摘し、これを統一して、國土妙の風光と人類の靈光を發展せむ

とせり、
國土妙の風光と人類の靈光……これを現實ならしめば、吾人の主張せる、人壽百歳、豈に難しとせむ哉

本佛の因行果徳の二法は、妙法蓮華經の五字に具足す我等この五字を受持すれば自然にかの因果の功徳を讓與へ給ふ、

とは聖祖日蓮が國土妙の風光と人類の靈光を現實ならしむるための、言明也

吾人は諸の惡魔を排除して時間的には人壽の靈光を發展するために百歳ならむことを切望し、空間には人壽の靈光は本佛の壽命とおなじく、事常住ならむとを祈るもの也、

今や救世の誓願を、標榜として生れたる統一は百歳に達したり、而してその事業は尙中流にあり、庶幾、精進力を以て千字滿宇と累進し、その功果は、その數よりも多からむことを希望して己まざる也、



來者不拒

聖門合同期成同盟會二顧問に呈す

界府 村上貞藏

之を道路に開く第三回夏期講習會は遂に開かれざるなりと、嗚呼果して然るか案亂せる教界の刷新、錯雜たる佛徒の統一を期して起されたる斯會は、幸にも佛天の加護、僧侶の熱誠によりて成功の行程をたどりつゝ、天下の希望を負ふて回を重ねる己に二、瑣々たる一貧生團橘香會の手より移されて堂々たる僧正居士の主宰せる期成同盟會の安固なる双手に抱かれ前途の希望燦として旭日に輝きし夏期講習會開設の好期其大半を過す、而も閑として些の聲なし、嗚呼余輩此不吉の魔説を信せざらんとするも得ざるか、佛滅後二千九百有余年開宗六百餘歳の今日に當り、教界亂麻の如く邪法は蔓り、正法は影を潜めて、佛佗の福音は又聞く可からず教界の統一は遂に期す可からざるなり、果哉人道は凋落し賄賂公行淫風注溢、善神捨去り惡鬼横行、世は開宗の昔に退歩し了ぬ、身を最高最貴の教界に置き信を至妙至靈の正法に捧ぐる聖祖門下の士、焉ぞ慷慨悲憤不惜身命の聖勅を奉じて立たざらんや谷極て道自ら生ず、腐敗せる教界又烈士あり、劍と提て立つ者數十、熱誠なる學生に依て組織せられたる橘香會は教界革新聖門合同の急先鋒として現れ、此の如くにして夏期講習會

の偉業は瑣々たる一貧生團に依て、二歳の昔龍口の靈跡に開かれぬ

二三貧生の熱誠岩石を徹して進路を開きしより、茲に多大なる希望は輝きて聖門合同教界刷新の聲到る處に及び、紀念大會を生み、宗徒大會を起し、十有七々の重要な決議案は強盛なる僧俗の口より聖祖靈前に於て其實行を誓はれたり、嗚呼偉なる橘香會の諸士、卿等の聲は小なり卿等の力は微なり而も其業は大なりき、金力學力の小は熱誠の大に償はれて千古不滅の偉業教界統一の大事は卿等の手に依て其進路を開かれたり、嗚呼大なる哉

我門下尙は卿等のあるあり和風汚俗四邊に汪溢すとも余輩枕を高くして安ずるを得んか

先鋒既に勝つ大旗焉ぞ動かさらん、期成同盟會は聖祖靈前の誓を果然んとして現はれ、又我が門下の勇將三人三軍に將として立、熱誠なる僧俗數萬を帥ひ、旗鼓堂々隊伍正々戦はざるに已に敵を呑むの概あり、講習會の事亦宗徒大會決議案第六條として聖祖の前に誓はられ、同盟會目的の一に加へられぬ、余輩の喜び何ぞ是に過ぎん、思へらく橘香會の諸士其熱誠其精神大且偉なりしと雖元微少の一學生團、力猶足らざりしを知る

然り而して第一第二の講習會に於て尙は完全せざる處多かりき而も今や堂々たる三顧問主宰の下に移されて其施設全きと得んかど、焉ぞ知らん期成同盟會に移されし初年にして講習會不開の醜態を演せんとは

る僧正居士の手に依りては開くを得ざるか、先鋒に依てすら破り得たる弱敵は期成堂々隊伍肅然たる本軍に依りては破り得ざるか、聖祖靈前の誓を果然んとして身命と堵し名譽をかけて責任を帯びたる三顧問今何の顔有てか天下に見へんとする
卿等今惰眠を貪れるか既に死滅し終りしか將何等かの理由有りて存せるか
十有七々の決議未だ一も遂行せられずして教界の前途益々多事なるに際し、何の暇有てか惰眠を貪るを得ん、余輩は信す本化門下の萬衆の敬信薄ならざる三顧問はしかく無責任ならざるべし、而して無神經ならざるべし
然らば死せしか余輩未だ其報に接せず又信せざるなり、去らば何等かの理由あるか、或は云ふ一に幹事の不都合に依りて同盟會は今や解散の悲運に類せり、是講習會不開の因なりと、余輩は信す勇將の下弱卒なしと堂々たる僧正居士の下何ぞかかる幹事の存在を許さん、假へ一二醜惡の輩ありとするも之を以て講習會不開の理由とはするにたらざるなり、聖祖靈前の誓は而く輕き者にあらざるなり
然らば卿等三顧問は聖前の誓を以て厘毛の價直なき者とし實行するにたらずとするか、將た其事業の難きに恐れ旗を巻いて逃走せんとするか、何ぞ其聲の美にして其行の醜なる、何ぞ初の清くして終の汚ある
初め卿等の立つや死を以て責任を帯びたり、何等かの成功なくんば復天下に見えずと聲言したり
而も今や講習會の事此の如し他亦押して知るべきなり、一滴

を奪て湖の鹹を知り一花開て春陽來復を知る、郷等の手に
よりて聖祖靈前の誓願を遂行するを得ざる火を見るよりも明
かなり
卿等些しにても良心あらば宜しく最初の聲言を重じて身を教
界より引き、死以て聖祖に謝し天下に謝すべし、一の成功な
く一の希望なき同盟會又惜むに足らざるなり、其主宰を失ふ
て病蛇の如く永く醜態を暴露せんよりは、宜しく解散して天
下に謝し聖祖に罪を乞ふべきなり、之れ今日に當て余輩の三
顧問及び同盟會に所期する所、若し尙ほ優柔不斷決するなく
んば我れに三尺の劔あり、醜惡なる郷等の首へ劔に價せずと
雖も、而も其の罪の大日も假借するを許さず、乞ふ費等の
首に加ねんか

嫌 焉 錄

高田 日暢

往古我宗祖日蓮聖人「實教より權教に學者多し」と宣ひける
が六百載下の現代も亦酷だ爾るを見る本門よりは迹門に迹明
よりは權教に外教に無宗教者に層々學者多く毫勢なるを示せ
り是而に世道人心の爲に不祥の現象と謂ふべし尙且六百年の
中間も亦復恒に同様の傾向なりしか如し權實論等の幾多筆戰
の遺録に徴するも思半ばに過ぐるものあらん是抑も何故歟曰
く人爲的畫策たる教團組織の巧拙制度の善惡如何にも由るべ
けれども亦主として神秘的教門内に一大原由の存するものな

點よりも遂に第一義に順するを得ん世の警吏軍人すら皆一定
嚴規の服制に法りて各職權を表彰神護するにあらあずや然る
に我宗として是等の易業すら實行せられぬとせば其已上重要
件に於ける手加減推して知るべきのみ

予は去ぬる月我宗會に列席して窃に歎すらく宗會議員廿名中
議場に出てて口に公平々々の語は仲々名物なるが其實真正に
議事せん積りの人は難有風流徒らに權柄か何かの爭奪に熱中
し隨分論議は囂々すれど一種異端の辨難にして其間戲笑私語
を副へて一向無頓首の振舞別に何の見あぐる處もあらず故に
眞面目に居るも仲々欠伸出でずは小憤起りて居堪らぬ位のの
始末に是非なく朱にせらるゝ情さよ帝國議場の近時の光景を
苦々敷想ふに比して一層太甚しさを感ず是ならば我宗は寧單
純な相談會の方が遙に、正直にして敏速なるべし噫佛天希
くは吾宗門の現状をして變易的に早世せしめ次て正新の教團
を産出せしめ給へ宗門有力の諸君よ今や眞に見戲然として徒
消するの時には非るを自覺し予か祈に賛同せよ迎も今日の狀
態にては羣餘の教派に並肩することも難かるべし況や悉く責
落して法王の家人となす洪猷をや

然而して我宗の文士學者の態度は如何に講演者と執筆家と無
きにあらあず學林も機關新聞も有るか如しと雖も奈何せん其内
幕に慥焉たるもの多きを文士ども他教派に比せば零なるべ
く學者は協同合力して青年を訓迪すること至盡なりや一般教
化を布くこと周到せりや三五の高僧達すら協力して教學を策
勵せられざるに非ずや教導化益の甚だ稀少なるに非ずや五百
の寺衆日々の所作する回向文や別時法要式すら公定實踐せし

くんばあらず(兄弟抄祈禱抄治病抄御勵氣抄等拜考)此間の
消息は宗徒宜しく考量見しおかざる可らず左れば實教の中
心本門法華の我黨は人爲上の制度等が他の教派に優勝なるも
尙幽微の一面に障難の甚だ恐怖すべきあるに況や我宗の施設
は多く他に劣るも優ることなきをやは爲に或教派の後へに墮若
して今に宗運の開光を見られぬ次第多なる歟予は我宗門の現
行宗制に於ても頗る議すべきもの多きを認む從淺至深的に先
づ輕小のことより繕せば彼の僧位の餘りに多階過ぎ宗門統治
の爲の分別が却て邪魔物と化せる如き隨て其法衣も亦亂雜を
極め徒らに競ふて奇觀に照耀し度さに窮貧の身分を顯るに違
なく無理に多大の價金を投じて白、金襴、紫、緋等華美なる
を訓製せざるを得ぬ場合に逼り而も半藝人の如く莊飾するよ
り却て其神聖を無するに至る斯く甚だ無益の事柄に苦心する
丈正しき教感を恨滅するの風を助長せしむ是等も實に宗門を
俗化し衰頹せしむる一因たらずんばあらず思ふに僧階は多く
も三等又は二等に分ち宗長丈特別にて其他の區別をば敢て上
下尊卑の懸差別感を高め得ざる風を馴致し以て實際世の人爵
にも比敵せざることを善く了得せしめ彼の大會の席順などにッ
マラス感情と惹起せぬ方法をとり年長かいろは順の如き想念
と懐くに至らば實際何程の公益も無きに妄に貪請する弊根を
絶ち以て其意氣を轉用して一人も多くの教徒を引導して其販
依尊重せらるゝ様に仕向くる一般の趨勢を作らんか法衣色質
の如きも自由に制定さるべく黒衣紫袈裟白服紫金紋位に局
らしめ一同格守せしめば價金体裁意匠注文等に苦慮少く僧形
自ら神々しく感見せられて形益の一分をも増し自他をして此

め難き也曾て道友井村君が方便品十如是讀誦に關する質議を
發せるに及び其動機の奇異珍妙なるに對しても各々終に何人
も明解を與へられざりし也(最も靜谷なる人の少々申されし
かど)爲に非才不文予が如き先覺の論道を聞かんとて俟る者
をして無聊に昏睡さするのみ

更には是等よりは至極重要問題にして實に日蓮聖人門下一般の
頭上に懸りて容易ならぬ宗祖が蒙古調伏の有無旗曼茶羅の眞
膺に就ては如何に古來より一般に眞事實と既定せられ現に我
宗綱要に明記し居るものが而も反對論者より觀る時は未だ適
證を欠けるの弱味なからずや乃ち彼の安國會の居士達は之を
大に異議し痛論警告せるとか予は未だ之を詳知せざれども其
注入に成れる所論と覺しきが曾て大陽誌上に高山某の日蓮上
人論として現れ其一節に蒙古調伏は無實也旗曼茶羅は虛傳也
との怪文は公にされたり此議甚だ首肯し難き處必ずや宗祖門
下の有力者中文士學者たるもの猛烈續出して之を糾明論決せ
らるゝならんと俟てども、遂に今日まで空しかりき特に我
宗の「統一」も曰はず僧俗總て黙々たりマサカ某の名文に遊易
せるにはあらし思ふに事實の精確を探究了得せざるの故なら
ん歟始終多くの要用論文(?)をものせる人に於ては何事指て
も之を道ふの責任あるを感せざるか名僧歴々の御方果して如
何にしたりけんと獨り啣ちぬ而し高山某の所論は最も解明也
其意に云蒙古來襲は日蓮の主なる釋尊か日蓮の主張を信用せ
ぬ日本國を非常手段もて徵戒せん爲に遣はしたるもの日蓮の
爲には正しく御味方也日蓮何ぞ同志打的に味方を調伏すべき
ものならんや隨て旗曼茶羅は無稽の膺物也故に凡て何らの正

史にも載掲しあらず左れば銅像建立も無意味也と云ふに在り安國會衆の所詮も亦是に大同ならん然るに予は終に之を信認する能はず所以者何宗祖は常に官若し我諫曉を用ゐずんば必ず外寇あるべし敵軍退治の祈禱は舊例の眞言師に仰付可らず吾能く之を受んと公言せる是則ち如來使の吾に反抗する此國は必ず外寇の徵戒を被むるべし佛敎懲戒の蒙古軍は我師釋尊の御意に投ずる者なれば若し吾に悔謝信頼せば忽ち掃蕩することを得べしと其機密を付度して言ひしなるべし若し然らずば本化の知見を奈何にすべき亦神秘的に吾助成者たれば之を調伏し得ざるを豫知して而も欺瞞的に大言せしものとせば云何ぞ聖人の資格を完ふせらるべき門徒永く信仰し能はざる筈也寔に宗祖が蒙古調伏は當時の國家上よりするも御自身に鑑みるも實に左もあるべき事也我國は歴代の皇室を始め總て事變に遭遇せば必ず佛敎に依りて怨敵降伏の法を修せらる恒例たり故に道般龜山天皇は自ら身を以て國難に代らんと祈誓はせ給ふ程にて國國の社寺殆ど公に私に祈禱せざるはなく且又屢々聖人を抑壓せんとして成らず其關係より爲人豫言靈感等に驚歎せる鎌倉府の時宗ら内心己に危急存亡の秋に出會して信教思想の一轉機を生じ聖人に依頼せんと思ひ起りしなるべく傍ら四條池上氏等法華信徒の府中史員より荐りに懲慙せられしは勿論にて是が爲に遂に惟康親王の署名もて延山の聖人に使者を立て切に頼願せしなるべし而して一切の大事の中に國の亡るは第一の大事也と揚言せる聖人としては正に安國策の秘密を示すの好機會とし所謂法力を驗顯して國家を救護せんか爲に豫言適中を證明して官民を指導せんか爲に依頼を俟

儲けて使ち直に祈禱を行は能く之を平定せしめたるもの也然り宗祖は延山を出でずして祈題せられ其印璽を使者に授與して鎌倉府に贈り之を陳頭に翻々進められしものこる旗曼茶羅にてある也

而して佛院の徵戒するや大曼茶羅を懐ける宗祖に舉國服從せしむべく思召ものにて則ち日本帝國を永久に活動し官民を萬年に相樂せしめんか爲なれば此國家を滅亡せしむる迄に擊破するは斷じて作さざる所也即ち當時蒙古軍の優勢なる經過と云ひ戰鬪力と云ひ凡てが終に我國の敗壞に終るは分明に想見せらる然るに好運にも天災の爲に彼の軍を海中に殺し得たるは何故ぞ決して偶然にはあらじ抑も甚大の仔細なくんばあらず思ても見よ無意味に吾の勝利に飯するか又構相成るかに至れば徵戒の動力もなし是非とも法使に哀訴接近せしむべき善因縁を産ましめざる可らず若し亦唯一の愛弟上行菩薩を再誕せしめて其者をも國家と共に亡ぼすは亦復救世の大法をも滅して果して何の爲に再誕せしめたるや懲戒したるやの聖意は壞れ佛院は凡夫の計畧にも如かざる無謀の徒事に畢らん是實に佛院の忍びざる處斷じて爾ることある可らず

且らく譬へんに師あり高弟を使はして遠在する諸弟子の暴戻を教誨すれば願はず遇々來らむとす力士の怒に觸れて諸子は懲戒せられんに寧高弟も亡きものにせらるを放任するの理あらんや是實に見易きの理也論者或は云はん我味方なる數多の蒙古軍を應殺するは無情之極罪惡を如何んと其れ佛院は蒙古軍を味方とすと云はば云へ直接何らの關係もなく軍人ら又毫も關知せざる處にして其味方なりとは乃ち佛意如來使に背き

て自業自得他の來襲を招くべき風潮を起せしに由り左なきだに四隣兵と行りて益々旺盛既屢する蒙古軍が得たりと已に日本國に出馬すべく逼れるものは全く正法の叛逆國と成りしが爲に之を召寄せたるものにして之を隊防するとなさざりしは因果天然律に法りし自然の結果也佛院は天然律の表現者故に自ら之を味方とするに似たりとの見知よりして云ふ也而し佛院は本來何を以てか天然律に背く行爲を翻改し順從せしめんとするに在るが故に一たび法と使に哀訴したる日本國は應に佛意に叶ひて直に彼此順逆地位を代へたれば彼を退治するも罪科を構成せざるのみか殺人てふ惡罪を好める彼は法と日本國との犠牲となりて果敢なき最後を遂けしもの也是圓滿自在神力の動作にして隨て亦本化再誕の宗祖をして八面殺活自由の權能を附與せしめし所以にあらざるや

既に論理上のみならず事證的旗曼茶羅の現存せる是ぞ敵味方に取て究竟の審判官也深考熟慮断に鑑査を遂げべく輕々に關却すべからず高山某は何故に此事證を精確に檢察せざりしか實地に明鑑審査して能く眞の腐物たるを確認せば大方識者の承引を求めて而して後に公々然と天下に之を鳴らさざる可らず而も但考證云云の史的明證なしの一論面より輕卒にも之を非認して銅像云云とまで辨斥するは殆ど流弊に墮ちたりと云ふべし假令俗間の考證上充分の正史なしとも強ちに之を非認すること能はざる也天下幾萬事件中斯る類例多々あるべく歴史とても神佛のものせる完善無失神聖のものとは云はれず或は評傳し脱漏することあらん彼の楠氏兒島氏が實際千古の大誠忠者にてありけるを或學士は自己か正史と認むる典藉

に明記しあらずとの下に敢て無實と辨論せしか如きと一般誰か之を首肯するものぞ而も怪む日蓮門下數千の僧侶と學者文人か關として何等抗辨の聲もあげざることよ是抑何か故ぞ予は疑ふ宗祖に忠實の薄弱なるに非るかを此問題の解決如何に由て若しか聖人の御意没し事實を誤認せば神怒佛罰を被るべく又之に反して正當に明断して能く世の指導たらば實に無上の大護法家たるべし御門下一般は是非とも佛敎賞罰の極點の何れをか頂戴せざる可らず豈ウカカとして居らるべきものならんや故に此際旗曼茶羅の所藏者は其眞贋を力めて高明にして世の士女に首肯すべく命令せざる可らず其方法は鑑識に長けたる明人に考察せしむるも可也宗門の高僧に拜鑑せしむるも佳也而して特に上至尊の窺覽に捧げ天下に公告する最も善からん幾多の工風はあるべし而してよし一朝贋と想定せらるるも恐るに足らじ又明かに容認されずとも甚た苦しからず但眞熱誠を捧げて佛院と聖人の御意に叶はば之を不問に流すより優ること幾干ぞや善は潔くすべし此事件を我思想の一問題として極力之を鼓吹せば其衆庶に益を與ふること廣大無限なるべし然るに是等の決断なきは則ち他の方面よりも別して我黨に學者なきによるもの歟非歟予は儘かに元冠調伏有實也旗曼茶羅眞正也と信じて疑はれぬもの一人也宗祖か公場法論と安國祈願の理論實際相持て宗教上より天下を一統せん御意見は遺文所在散見する處也故に預言に應じて事變起るや充分の警誡と周到の準備とあつて官より依頼あるや直に終結せられしもの旗曼茶羅は當時の祈禱本尊たりしや疑ひなきと同時に宗寶として永く末代を照破すべきもの也豈此著明の大

事實を虚無と誣ゆべきならんやと予は想ふ也識者乞ふ明断を予に示し何としても將來疑ふに餘地なからしめよ

統一團報

中央統一團友會の概況

前號紙上に公告せし中央團友會は、豫期の如く月の九日を以て袖浦々頭鳳凰山妙國寺に開かれたるが、秋立つと云ふ土用のあけし曆の知らせも、何がさて九十度以上の殘炎、中々に土用中よりも蒸しあつき苦しき、何に譬へん方もなく、乾坤風死して仁王門の鬼瓦火を吹かん計りの爲躰、これでは逆も亦會者もと思はれしに、吉田三郎左衛門翁の八里餘の道を物の數どもせで、參會せられたるを先登第一として、大兵肥滿の今成乾隨師が、法衣の袖を汗みづくにして馳せ參じたる、増田準道師の意氣揚々として玄關に頼むの聲を掛けたる、其他三々五々隊をあして、北より南より參集せる會員、無慮四十餘名とぞ注せられき、特に此數十日来神經痛の爲めに足部のマヒせる松尾忍水居士が、車夫に扶けられて玄關より二本杖の怪しき足どりもて室内に入り來れる、其熱心のはど會員一同の敬意を表する所となりぬ

の趣味もて充され、やがて午餐の清興は始まりぬ、午後二時半、一同席を大廣間に移して、本多團長を正面に山根顯道師側坐に淨凡を控へて、撰法華經奧書法難記、賜三輪殿書、日經一期之横難、渡邊氏所藏の消息、日隱上人勸進記等の朗讀となし、一同謹聽、讀むもの聴くもの共に經師當年の面影を忍びて、目眩の間覺へず露を宿し、讀んで大法難の現狀に至る毎に、上人が凜乎たる氣節に感乎せられて、粟肌蕭然たるもの屢々

さて朗讀會を舉ると同時に、一同本堂に移りて今成乾隨師の開講の趣旨に次ぎ、本多團長一場の講演あり(其筆記は本號主義欄に掲載)午後六時半閉會、一同晚餐を喫して、おのがと、家路に着きぬ

以上團友會の概況斯の如く、同日來會者の芳名は左の如し
(附言 報告の書讀雜考餘等は責任者忍水病氣の爲め準備不整頓にして沙汰止みとなり折詰拜當に代ゆるにさらく茶漬を以てせしは美譽の折柄仕入れ物の腐敗を氣遣ひてなす)

- 本多日生上人、今成乾隨師、山根顯道師、田久保日城君、増田準道君、吉田三郎兵衛君、中原福藏君、松尾忍水君、小嶋傳次郎君、高島音吉君、西山孝次郎君、小澤八藏君、横山與次右門君、野間平次郎君、淺尾清藏君、寺尾利右衛門君、井口善叔君、大原亮君、市川鏑太郎君、佐々木正造君、三上吉太郎君、竹下もと女、竹下龜太郎君、大嶋よし女、金子千代女、佐々木さん女、福原なか女、鈴木岩吉君、高石徳太郎君、高木作太郎君、福原豊次郎君、熊井本光君、佐野泰晋君、田邊慎一君、其他數名

はん方なく、方丈の各室には位地よく慶長法論に關する珍什及妙國寺什寶を陳列して、考古家の垂涎を禁する能はさらしめ、圖書、抹茶、雜誌の縦覽等各々其好む處を縦まにせしむるの装置、注意おさくぬかりなく行届きぬ、今其陳列せられたる珍什の重なるものを擧ぐれば

- 日經上人著賜三輪殿書、全勝法顯示華端書、全日經一期之横難、全直筆撰法華經并法難記、全消息十九通(卷物)全越前渡邊氏所藏消息一通、經師高弟日秀上人真筆消息集一冊、全消息集六卷(綴り卷物)、全高弟日隱上人勸進記一冊、經師本尊二幅、全一編首題一編、日秀上人本尊一編、日善上人本尊一編、經師慶長法論の批判(繫珠錄六ノ下)、淨土宗某著四度宗論記一冊(以上は今回大日本史料編纂の材料として宗門有志家より本多師の手を経て帝國大學に提出せしもの)、宗祖真筆一部、卷細字法華經(賜天目)、全扇面の和歌、古書出山の釋迦、加藤清正の手判、土佐將監光茂の筆の繪曼荼羅、絹地、法華の經相を寫せしもの、宗祖真筆本尊(賜天目)、日什上人本尊一編、宗祖與上野殿女房御消息一通、本迹問答記、日乘上人筆開祖諷誦文寫、妙國寺古文書一綴(以上は妙國寺什寶の重なるもの)

斯くて時針は容赦なく其歩を進め、十時となり十一時となりさすがに廣き該寺の客殿も、ろよどの風も吹かぬ炎熱、アナ暑し、アナ苦しとの聲喧しき折柄、淺尾清造君の氷水の接待をなしたる、時に取り、何よりの思ひ付、一同息吹きかへして、忍水居士の談論趣發、青村道人の珍什説明、さては今成對井口の團基に田久保日城の愛敬嘶し等、滿堂何となく脱塵

京都通信

白藤生

編輯員諸賢閣下
時下炎暑之候、諸賢愈御清祥御勉勵之段大法之爲め、奉慶賀候
扱て毎月必ず致さんと約せし京都通信、近頃怠慢仕り慚愧に堪へず候、親愛なる諸賢希くは、海大の御寛容あらんと奉祈候

京都の宗教界も其後別段變りたる事も無之候、三、四、五月の頃は、基督教者大に傳道を勉め、彼のホール博士や、ベシトコト博士の十日若くは七日間の講演、及其他の演說會等類りに各所の教會に行れ候ひしも、六月以降はトント火の消へたる如き有様に御座候

一般佛教界に在りては、六月頃哲學部關西同窓會の催に拘る、河口惠海氏の入藏談、及び京都教育會にて催せる妙心寺の僧某氏の渡清談有之候のみにて、其他は例に依て例の如く京都流の佛教界、先づく平穩無事、天下太平に御座候、日宗界御同様に御座候、其中去四月廿八日に於ける各派合同紀念會の催は、老朽の十六山、嫌々ながら賛成せざるべからざりしは以て一般の氣運を察すべく候、妙蓮寺(本門法華宗京都十六山の一)及安國會は毎月一回(位)、道路布教爲致居候、本化中央青年會は毎月一回演說會相催候、去七月四日發會一週年の祝賀大會相催候、午後大演說會にて辨士は野口義禪師、林日法師、中川觀秀師等、數名出演せられ候、能仁事一師も出席の筈の處布教先の日取の爲め、出演出來ざり

しは、甚だ遺憾に候ひし其他余興として、筆(鈴木鼓村氏)、尺八(樋口孝道氏)、オルガン(中植林生)催し候、青年の元氣は充分に鼓吹され申候、

總本山妙満寺に於ては、毎月十八十九の両日は、必ず演説會相催候衆も漸次増加し來り候、殊に部長野口師は、青年の信仰開發の目的にて、現今流行の社會問題、心靈問題等に關する書生向の演題を掲げ候より、近頃頗る青年の聴衆を増したるは誠に喜しき現象に候、

隨喜説教會も、毎月相催居候、

去月大阪の宗學研究大會々員(約八十余名)、修學旅行の目的にて田中氏に隨伴して、京都へ來り十六山を巡りて、寶物を展覽せられ候、特に妙満寺へ來りて開祖日什大正師及日經上人の御遺墨を拜觀したる節は、田中氏を始め一同は最も敬虔の態度を以て拜觀せられ候、就中田中氏は生徒一同に向ひ什祖の經卷相承の正義と、其六句七句の類語をも顧みざる熱心勉勵なる御弘通は、能く現今の宗門を成せしこと、經師の慘劇なる迫害の中に、愈大折伏主義の光輝を發揚して、終世不惜身命の大節を全ふしたるは、實に日蓮門下の名譽にして、又た敎家萬世の鑑鑑たるべく日宗歴史中の大事件なりとて、涙を流して一時間余も敎誨せられ候、我等も思はず感涙致候、

野口部長は目下日經上人の江戸城問答に關する材料の、蒐集に熱中せられ、爲めに炎熱も忘れたる如くに相見へ申候、京都は本月が盂蘭盆にて忙しく候、

明十日より廿日迄、明石に於て本宗専門の夏季講習會相催

東西兩洋の倫理觀……敎育家 狩谷銀三
水に就て……醫士 野上壽惠吉
區々たる迷情を去りて高潔なる信念を
確立せよ……宗敎家 能仁事一

各辨士は順次登壇され熱心に其主義を主張されて降壇し、次に能仁師はかの輕妙快絶の辨を以て開口先づ現今宗敎界の腐敗を慨き彼等淫詞迷言を撲滅を圖るは時代的要求の最大急務なり天下憂宗憂國の士は何ぞ俱に共に吾曹と協力一致して此の聖業に盡さざるか、猛省を促され最後は經文及び祖判を引證して本宗の他宗派に冠絶せる深遠なる眞主義を詳説され勸聲一番叫んで曰く眞に愛宗愛國の志士あらば來たりて我が眞本法華宗正義の本に拜跪して以て高潔なる信念を確立せよと滔々演ぜられし二時間餘の廣長舌は眞に講堂の聽者をして感動せし、邪智覺僧の甘言に酔へるが如き迷妄の徒をして醒醒せしめし心地致し申候

此日津山の山名木信師も出演の筈なりしが母室御病氣のため御來會なかりしは一問の遺憾にて候

佛敎講話會 萬信會の發起にて講話會は開催され申候處は當地の中央四階の高樓は高く市中に聳へ島城及び七階樓相競へる金波樓上なり當樓主は横山藤吉氏にして本宗熱心の信徒にて候時は七月廿五日各廣告準備は怠りなかりしに其日午前朝來より霖雨降りつゞけるため參聽者如何や氣づかひしに豫て敎義を蒐へる人々集り來れる者一百餘名風雨を冒して來れる程の熱心者なれば隨いで聽聞致し居り申候定刻となりたれば

開會の辭……大熊虎犬郎
佛敎大觀……能仁事一

師は先づ佛敎の興起より既き聖祖出現の目的と信仰の發展とを演へ他宗權門の非を論じ終りに願本の主義を奇妙の譬喩且つ主義を平易に經文御書を證に引きて詳々辨ぜられし訓示的の活潑語にて候中には感喜の餘り合掌唱題して去れるをも見受け申候尙當樓に於ても毎月開會の都合に候可賀可祝我が關山の地たるや以後益々敎光を發揮して近き内に中國の天に大光明を放たんとし期して待つ可き事と思ひ居り候爲法爲國御隨喜被下度候又々御報可申候 (八月一日)

さる、由に候、講師は小林老師、本多師、野口師、清瀬師、野老師、能仁師等にて久城茂太郎氏、三宅六藏氏、村上貞藏氏の三名發起の由に候、小生も飛び起つ程参り度候へ共、社會はソ一甘く自由を與へず候あわれと思はし被下度候、編輯員諸賢、時節柄御自愛專一に祈候、道友諸兄へも宜敷御傳へ被下度候、敬具 (八月十日)

岡山通信

萬信會員報

編輯量各位

靈泉期なる春光の雅季もはや昨日の夢と化し去りて今日は唯だ影を縁樹の葉陰に止め炎熱は烈んと蒸すが如く堪ゆるに難き三伏の夏の此頃各位筆硯愈々御勇健御自愛爲法爲國專一に奉祈候
我が萬信會に於ても益々大勇布猛に布敎罷在候何處の國々も此の赫々たる暑中には病的迷信の常に倍するは言を待たざる處にて候得共殊に我が岡山地方は淫詞迷言の甚大に流行せる地たるは既に各位も御承知の事と存じ候密に現時の形勢を觀察するに實に兼すに忍びざる迷信妄信の甚だ敷は遺憾の至りに候殊に聖祖門下に列する單稱日蓮宗の堂々たる大寺にこの事實あるを見聞す眞に上は佛祖に對し奉り下は正義弘通の諸先師に何の言働を以て報答せんとなす可憫の徒置に候はすや
當地本行寺主能仁事一上人はいたく此の事を憂憤され何かの妙策を施して一時も早く彼等門下の迷信妄徒をして日蓮聖祖の此の國に出現せし因由を確知せしめ而して我が眞本法華の法雨に濡はしめんものとて日夜寢食をも忘れて苦心致され居り候
我が萬信會に於ては七月廿日定期大演説會を山崎町本行寺に開會致し申候例の三新聞の廣告其他社ビラ等準備整頓せるが爲め午後八時には聽衆滿堂とばなれり其の演題と及び辨士は左の如くに候

開會と主意……會員

和氣通信

吉岡默水報

編輯局各位

宗門統一の偉業は今や着々として其歩を進め所謂「天四海皆歸妙法」なる大理想の現實となるも實に近き將來にあらんことを、曰く統一圖、曰く自我俱樂部、曰く蓮正會、曰く萬信會、曰く僧俗同信會、曰く何、曰く何、一として宗敎統一の目的を以て立たざるなし而かも此等の團體が現今各地に於ける活動を見れば何人も統一事業の長足の進歩と我宗僧俗の眞摯なる熱誠に驚嘆せんばあらざる也

茲に於て乎余は我和氣に於ける「同信會支部」が敎界活動の近況を報導するも必ずしも無用の事にあらざるを思ふ也、いて項を追ふて其概を報せむ
七月十日 當地長谷川久造氏宅にて本會臨時大演説會は開かれたり、此日岡山よりは能仁事一師の臨席を乞ひ午後六時より開會の事となり、此より先き幹事の手にて於て廣告願る行き届きたれば五時頃より聲手押し響する聽衆引きも切らず、繼がて定時刻となるや余は開會の辭を述べ現代佛敎徒が腐敗墮落の慘狀を痛論し進んで今や統一の氣運熱せりと呼び向進むて本會の希望と將來の方針を述べて降壇、次に本支部幹事長恒次傳之祐君悠々として登壇鼻下八字髭を弄し咳一咳して「宗敎と社會」なる演題の下に廣長舌を振ひ、次に高矢順一君は意の萌生談より宗敎上に論及して遺憾なく結論し、次に本町長、長谷川司眞治君「佛と佛」て演題の下に今日の神道者流の妄見を論破し巧みに佛の本林及關係を佛敎上より解釋し堂々一時間余の演説を試み、終りに斯の如きは到底短少なる時間にて宣へ盡し難ければ引續き次回に於て解すべしと云ひ降壇、次に本支部長吉田完亮師「轉迷開悟は吾人の要諦」なる演題にて秩序正然經典御書の立證と理論の正理に訴へ論し終り滿場喝采の内而降壇、次に本日の主任辨士として能仁事一師泰然自若として登壇、信仰の調査にて演題にて例の明爽にして痛快なる口調を以て今日の信仰は凡て分別的にして不統一なるを叱咤し極めて痛切に信仰の統一、本尊の統一、宗門の統一を結叫し堂々數方言約二時間に互る長演説にして午後一時結論して大喝采の内而降壇されたり

因に聽衆無慮三百余名にして他宗門の徒多く各辨士の論辨中最も靜寂に面々

も熱心に耳を傾けつゝありたるを見受けたるは支部員一同の尤も満足を表せし所也

七月二十日 説きの日我宗の教義に歸依して車種日蓮宗を改宗したる本町字會根周藤田太郎宅にて本會例月演習會は開催される事となり開會に先立ち支部員一同全家に於て吉田上人の導師にて改宗の祈禱は勧められぬ、七時終りて演習會は始まり

- 開會の辞……………恒次傳之祐君
- 日蓮上人と日本國民……………吉岡熊太郎
- 信の一字に二種あり……………長谷川久造君
- 神と佛(去る十日)……………長谷川司真治君
- 統一綜合主義……………吉田完亮師
- にて總衆百余名頗る盛會にして多大の法益ありたり十二時閉會
- 七月廿三日 古來我地の慣例として舊六月一日は農家一日の疲勞を休め俗に(野休)と稱する日にして此報は平日如何なる不熱心の徒も必ず寶前に會して徹夜修法若くば散敷をなすの例あり依て此夜を利用して一大法話會は開かれたり

「開會の詩」森香治郎君「釋尊の本懐」恒次傳之祐君「女人成佛論」長谷川久造君「須く執着の念を離るべし」長谷川司真治君「望日蓮の大理想」吉田完亮師にて各題下に得意の論鋒を以て本宗の主義を發揚し、參詣者爲めに大に法雨に潤ひ一同の歡會せしは翌朝五時の頃なり

七月廿五日 不受不施の管見釋日正師隣村益原の教會所に頃日留錫せり宗門統一の大方針を述べ今や日蓮宗各派が比較研究の好時節也幸に本寺僧侶徒數十名の爲めに眞下一片の法義を語る「を諾せば宜し矣否らざれば會員に於て統一主義の演説を試みなければ教會所の「偶」を拜借したしとの意を宣したるも教會の住職某某不在なりと口實を以て書狀は封の儘返戻し來りぬ、唯何等の無禮不在なればとて釋管長に宛てたる書狀も其儘突返す如き日本或寺を侮辱したるもの也宜しく待留執事の手を経て釋師に之を呈すべしとて再び使を派して書狀を送りたるも「釋管長は明日出發の筈也」と云ひ例

少の時間ありたれば路傍演説隊の一行は停車場前に二旋の玄題旗を押し立て熱誠なる上田智量師の演説は始められたり西より東より蠅集し來る群集に搗て加て列車の發着と同時に下車したる多數の人々吾先きにと玄題旗を仰ぎ見つゝ流汗拭ふに違なく皆々隨喜渴仰の模様に見受けられたり少時にして小林大僧正を乗せたる列車は來れり演説隊の一行は「ブラットホーム」に整列奉迎し直ちに同列車に投じて演習一聲六時四十分明石着此處は流石に講習會所在地のこととて多數の會員は一同驛前に於て奉迎し小林大僧正は豫て設けある所の休憩所に少憩の後奉迎の會員一同と共に腕車を連れ海岸眺望に富める旅館街濠館に投せられたり

(二)開講式 炎帝得意の時代八月十一日東播明石の浦善量山圓乘寺に於て開講式を擧ぐ當日午前七時小林大僧正を始めとし野老、能仁の諸講師其他信仰燃るが如き數十の會員村上幹事の案内にて一同着席左の謹嚴なる式典は舉行せられたり開講式順序

- 第一鼓 會員入場、講師着席、一同法樂
- 第二鼓 發起人總代開會の辞……………久城茂太郎
- 講師演説……………能仁事一
- 會員總代祝辞……………山名本信
- 有志演説又は祝電十數通……………村上貞藏
- 發起人挨拶及報告……………村上貞藏
- 第三鼓 小林講師講演開始……………村上貞藏
- 萬歳三唱、一同禮拜、退席
- 式終りて能仁講師の音頭にて 天皇陛下萬歳、頭本法華宗萬

の三十六計の兵法に掛り支部員が打角の計畫し「不得要領」に擲られたん彼不受不施派一派が如何に卑怯、に如何に意氣の銷沈せるかは、余等寧ろ聖祖當年の御本懐に思ひ至りて爲めに無量の涙なき能はざる也 (以下次號)

○津山通信

津山上之町本蓮寺に於て去る七月二日午後八時より演習を開會せしが其の演題及辨士は

信仰の力……………山名本信

佛教に於ける苦樂の觀相……………原田容廣

顯本之光

播州之天地由來勝地多し就中須廣舞子は更なり明石の風光に至りては往昔歌麿人丸の嘆賞措かざりし處とて山紫水明南の方淡路の翠巒を指呼の理に眺め舞子の清潮銀波を起す所の自然の雅趣津々凡筆の寫し能はざる別乾坤なり宜なるかな此勝地を下し顯本法華宗西部夏季講習會は左の發企人三氏の熱誠にして而も注意周到なる準備の下に開かれたり

發企人 村上貞藏(舞) 久城茂太郎(岡山) 三宅六藏(姫路)

(一)講師歡迎 開會式の前日即ち八月十日東都小林大僧正より十日午後六時着明の打電に接したれば會員の一部は炎威燒くが如きも係はらず道を海岸に取り恰好の場所を撰んで路傍演説を爲しつゝ舞子に至り小林大僧正の到着を待ち此間多

歲、夏季講習會萬歳を三唱し一同退席隨意解散せしは午前十時半頃なりし

(二)會場の景况 會場は善量山圓乘寺の本堂を以て之に充て山門には幔幕を打繞ぐらし大國旗と交叉し「顯本法華宗西部專門夏季講習會場」の十五字墨痕淋離たる大表札は掲げられたり又本堂に至れば全じく幔幕を廻ぐらし「講堂」てふ表札を掲げ一見坐ろに崇仰の念を惹起せしめたり而て講堂内の講師席は正面に「テーブル」と置き其傍に黒板あり講師は椅子に倚りて講演あり聽講の僧俗一同法衣又は羽織袴の禮服着用にて端坐謹聽し流石は宗教的會場の事とて其靜肅なると云ばかりなく「禁喫煙」の貼紙も殆んど手持無沙汰に見受けられたり

講師休憩室及會員休憩所としては圓乘寺の客殿或は廣間を以て之に充て時候柄麥茶の用意杯頗る會員を満足せしめたり、因に此會場の設備に關しては圓乘寺檀中總代藥師寺卯兵衛中村初次松本助藏の三氏大に與りて力あり其會場に要する器具萬端の幹施其他講師及會員の旅館交渉等先着の幹事及會員と共に大に力を盡されたるは一同の感謝措く能はざる所なり

及茲に特筆して聊か謝意を表するものなり

(四)第二回講師歡迎 待に待たる本多大僧正帝都出發の電報は來れり是に於て會員を代表して久城茂太郎 國友文次郎及幸にも其當日數分前來明ありし岡山の豪商小野善吉の三氏は時間を計りて神戸に至り本多講師を迎へたり而して本多講師着神あるや右三氏は直に同乘列車は徐ろに山陽線下りの軌道を運轉し始めたり時恰も午後三時頃なりしかば傾き掛けし太陽は無遠慮にも横合より列車中を直射し來り其蒸し曇き

苦しさ云はん方なし仍て一行は舞子に下車全地有名の旅館龜屋にて少憩の上午六時頃無事明石着夫より本多講師は重立ちたる人々と腕車を連ね前後左右多数の會員に擁せられ會場なる大藏谷圓乗寺に入られたり

(五)講演 八月十一日を始めとし廿日に至る十日間の講演毎朝正七時より開始厳格なる幹事の指揮にて會員一同定席に著き左の講題の下に各自所見を熱心に講演せられたり

(正科) 安 心 論……………小林 日 至
祖書研究の各方面……………本多 日 生

(科外) 佛教の絶待判……………清瀬 貞 雄
日宗歴史……………野 口 義 禪
信仰修養論……………能 仁 事 一

勸請文論……………野 老 乾 爲
(六)演説會 西部専門夏季講習會と其名こそ専門なれ其實此機會を利用して大舉傳道以て萬民を一味の法雨に沐せしめんとは異体同心習會合の講習會が豫て期したる所なれば一部専門の講演のみにては満足せず大々的奮發を以て毎夕演説會開設することとはなりぬ思へ人は皆炎暑に苦み酷熱を避んが爲め或は海水に浴し或は遊園地の「ベンチ」に涼を貪るの折柄十日間打續ての毎夕演説其熱心と勇氣とには殆んど感せざるものはなかりし其熱誠なる辨士及び演題は左の如し

十一日 開會の辭……………會 主
時事所感……………山 本 通 辨

に交名會は始められたり七十有餘の會員交々起ちて其住所氏名又は主義信仰等を簡明に述べて親睦の端緒を啓き夫より酒間數番の席上演説ありたり或は詩吟劍舞等ありて活氣自ら満場に満ちて思はず快哉を絶叫せしめたり而して此幕台には餘興として樂師寺卯兵衛氏の催しに係る大聲蓄音機は一層の興味を添へたり斯くして一同十二分の歡を盡し和氣満々の裡に萬歳を三唱し午後五時半頃隨意散會せり

(八)青年廣告隊 鳥兎々々旬日の會期今將に盡なんどす毎夕演説も最後の一回となれり會員今更の如く惜しみ小林本多の二講師に請ふて承諾を得たれば其演説會を一層盛大ならしめんが爲め標題の如き一隊は組織せられたり十八日講演終ると同時に十一名の青年團體は題旗を押し立てて風琴を奏しつゝ圓乗寺山門を繰出したる而して町の要所々々に於て廣告的路傍演説を爲し其間廣告紙は各町至る處隈なく配付されたり噫讀者諸君記憶せよ明治三十六年八月十八日炎天焼くが如きにも係はらず此健氣なる青年廣告隊の慈悲的行動は殆んど全明石の人士をして妙からぬ同情を表せしめたることを

(九)閉會式 式辭……………發起人總代 三宅 六 藏
謝辭……………會員總代 保 江 衷
閉會の辭……………青年總代 國友 文次郎
全……………不受不施講門派 梶 木 日 種
結願文……………講師總代 小 林 日 至
萬歳三唱、一同退席

因に云ふ右講習會に對し東京統一團本部より雜誌法の鼓數百部寄送ありしを以て一般衆人へ配付したり

何者にも勝つか……………山 名 木 信
十二日 國民と宗教の位置……………原 田 容 廣

統一主義……………能 仁 事 一
十三日 宗教の本領……………山 名 木 信

即身成佛論……………小 林 日 至
十四日 宗教と教育の調和……………井 村 尚 也

道徳の本源……………野 老 乾 爲
十五日 日出たるに燈を用ゆる人……………山 本 通 辨

統一の本領……………清瀬 貞 雄
十七日 但此大法計一閣浮提に流布すべし……………上 田 智 量

法華宗と人物……………野 口 義 禪
十八日 一佛二言……………原 田 容 廣

佛院最後の嚴訓……………野 老 乾 爲
十九日 開會の趣意……………村 上 貞 藏

時代の傾向……………保 江 衷
佛院最後の嚴訓……………野 老 乾 爲

甘露を以て灌かるゝが如し……………本 多 日 生
宗教五箇の定規……………小 林 日 至

(七)懇親會 講師の懇勞を兼會員一同の懇親會は十七日午前十一時と云ふに長春樓上の大廣間に於て催されたりも此長春樓は明石町の西南海岸近き處にあつて海水浴客を目的に料理を重もにせる宏壯なる一大旅館なり(講習會員指定宿)定刻に至るや樓上恰好の場所に臨時受附様のものを設け會費引替に入場券を交附し委員の案内にて一同着席配膳終ると同時

會員名簿 左は京都、大阪、堺、姫路、岡山、神戸、和氣津山、東京 數十百里と遠しとせずして集り來りし熱心なる會員なり

伊保 善 一	板野 延 次 郎	板野 文 次 郎
井村 尚 也	井上 平 次 郎	井上 利 平
原田 容 廣	原 清	萩原 し げ
橋本 善 助	全	長谷川 眞 次
野老 乾 爲	全	全
大谷 庄 次 郎	太田 萬 之 進	小 原 し げ
小野 善 吉	狩 谷 牧 二	兼 田 卯 吉
梶 木 日 種	全	神 戸 新 次 郎
河合 壬 午	神 戸 庄 吉	河 合 善 右 工 門
横山 傳 吉	横 山 耐 林	横 山 常 次
坪井 善 助	壺 坂 新 造	恒 次 傳 之 祐
長尾 あ い	中 村 祐 七	中 村 初 次
藤 波 四 郎	村 上 貞 藏	村 上 三 郎
全	全	宇 垣 卯 三 郎
宇垣 保 次 郎	上 田 智 量	野 口 義 禪
能 仁 事 一	久 城 茂 太 郎	全
久 城 と ら	全	久 城 延 次 郎
國友 一 つ	全	全
藥師寺 卯 一 郎	全	全
山 名 木 信	山 本 通 辨	保 江 衷
山中 政 吉	前 橋 里 次	前 刀 實 清
松崎 事 成	全	増 田 智 靜
藤原 龜 松	全	藤 河 常 七
藤 本 治 平	後 藤 幾 太 郎	小 林 な げ

淺尾 甲三郎	阿久津 伊	佐藤 通雄
三田 常次	山海 明八郎	清瀬 貞雄
清瀬 俊夫	木村 義明	木下 操之祐
桔梗 儀三郎	岸本 〇や	三宅 舜次
全 發遣	全 俊造	全 吉之助
全 要一	全 てい	全 諺枝
全 庄次郎	全 ひで	全 茂榮
全 節遣	全 慶次	全 操
三宅 壽次	流口 會旭	水野 藤吉
白井 日燕	白崎 米吉	重松 玉六
新谷 平藏	須山 茂三郎	鈴木 秀夫

記者云野老乾爲、原田容廣、梶木日種師等及村上貞藏、三宅六造、國友文治郎等諸氏の祝辭及閉會の辭等多々あれども紙面の都合にて次號に掲ぐることにし今は唯錦織小林兩師の祝詞及結願文のみ掲載せり諒焉

祝詞

我顯本法華宗西部専門夏季講習會を當明石の浦に開設し本日各篤信者諸士の來會を得て開講の式を擧ぐ宗門の面目易ろ旂れに過ぎむ意ふに一國の精神的文明は宗教の力に埃つこと最も多し而して一國文化の源泉は國民の思想界に在り故に苟も宗教の力を以て社會の進運を助けんと欲せば須らく眞正宗教に依りて社會人心を感化し開道せざるべからず茲に關西有志此會を發起し孜々學を積み徳を重す宗教者たるの實力を養ふと共に常に社會の進運に鑑み他日國家精神的文化の發達に向て一道の光明たらん

ことを期せよ開講に際し一言以て祝詞とす
明治三十六年一月

大僧正 錦織 日航
代讀 野老 乾爲

結願文

本門壽量の本尊南無妙法蓮華經 報恩謝徳
本門壽量の大恩教主南無釋迦牟尼佛 報恩謝徳
本門要法傳弘の大導師南無日蓮大聖人 報恩謝徳
茲に我等同志の眞俗相謀て顯本法華宗西部専門夏季講習會を設立し本月十一日より一句の間播州明石圓乘寺に開演し本化傳弘の要法壽量文底の深旨を講ず然る處漸々東西より來集せる通俗男女終に壹百十余人に滿ち一同隨喜信受し連日一切の障礙なく本日其滿講を告ぐ是實に佛祖の冥護と發企者及幹事の盡力に依らずんばあらず仰ぎ願くば本會々員一同此功德に依て無始の謗法重障を消滅し爾後信心増進して今回開法の要旨を轉轉し普く四方の衆人に傳へ或順或違終依此脱の妙判に契い天鼓毒鼓の兩益を施し以て自他俱安同歸寂光ならしめ玉へ
南無妙法蓮華經
明治參拾六年八月廿日

明石壽量山に於て
本勝院 日 至 謹而言上

和氣清風 (信通)

忍水兄足下、爾來久潤幸に恙無く時海暑に際するも筆研益々御清妍大賢候生今年孟夏島城の紅塵を脱し山紫水明の脚に歸臥し朝夕聖祖の遺書を細く頃比遺讀する所あり蓋し己身を修むるに足らん乎又意を煩す勿れ左に記する所は公務の余閑を爲よりはさて書綴りたるものにて本多師の偉大なる感化を同信の諸彦に知らしめ共に樂を齎せんの微心は外ならず足下余白を割くに吝なるなくむは幸之に過ぎず文字の昧を失ふは乞ふ適宜修正を加えよ (長谷川生)

本多大僧正と和氣赤磐二郡日曜講演

本多大僧正の人格は定論あり予も亦師の感化を受けたる一人なれば茲に贅言を要せずと雖も一場僅に四時間弱の演舌によりて與へられたる感化の如何に大なりしかは蓋し獨予の驚愕に止らず此の記事を一讀せられたる讀者諸君も亦嗟嘆せらるゝ所ならん少く之を記述す可し

(一)日曜講演會 岡山縣和氣赤磐二郡の有志者相謀り毎月一回若しくは二回一枝一藝に長したる名士を招聘して其所見を聞き以て見聞を治め旁ら有志者間の親交を結ばんと目的にて和氣赤磐二郡日曜講演會を組織す會員は目下約二十名なれども所謂來る者は拒えず去る者は逐はすてふ主義にて經費は各會員の分擔とし一般聽衆は何人も隨意(無料にて)傍聽し得る仕組なり其日曜講演と命せしは講師聽衆共々日曜日に便宜多かる可しとの考にて絶待に日曜日と定めたるにはあらず也

(二)本多師の招聘 日曜講演會は第二回の講師人撰中計らす顯本法華宗西部夏季講習會を播州明石に開會し本多師は講

師として西下せらるゝと聞き同會員にして本宗の信徒なる予に招聘の交渉并に同信會和氣支部に會場準備其他百般の準備方依囑を委任したるにより直に支部の議定め十一日午後六時三十分和氣發の列車に投し明石に到り能仁野老兩師村上久城國友の諸氏と協議を了し翌日午後四時二十分明石發の列車にて歸町し萬般の準備を終りたるは十五日正午なりき

(三)本多師の安着 十五日午後五時四十分和氣着の列車にて隨行井村師同信會和氣支部幹事坪井喜介氏と共に温乎たる微笑を以て講演會員總代武田郡視學(眞言宗)谷高等小學校長(一)致函)吉田師其他有志者信徒の歡迎と謝せられ一行腕車を駆りて豊昌山本成寺に駐錫せらる

(四)本成寺に於ける御親教 當寺は本多上人嘗て任職せられし緣故あるにより遠來の疲勞も顧す信男信女を集め信念には主義なかる可からずとて聖祖の開目抄を引證して佛法と世法との關係に付き詳々乎として約二時間弱の訓戒を與へられたり

(長)日曜講演に於ける本多師 十六日午前九時吉田師の先導にて隨行井村師と同信會和氣支部員を隨へて會場和氣町尋常小學校に臨席せられたる本多師は少憩後予の紹介にて登壇宗教心の調整なる演題の下に講演せらる(詳細は追て掲載するとあるべし)曰く現今日本佛教界の僧侶は昏睡せり一般人の宗教心は混沌時代也吾人は是好良藥の一劑を投與せざるべからずとて宗教心の解釋は眞善美(即ち智情意)言と替ゆれば推理的の満足、倫理的の満足、實在的思想の満足、此の三者を具備し且神秘懺悔冥福此の三心を有せざる可らず

(但し此の三者は何れも全然古來の傳説を信す可らず人事を盡して天命を待つ底の覺悟ありて後三者共に信して可也絶待に之を信せば迷信たるべし即ち外道たる可し)と此の六者を兼備したる者こそ真正の佛教也吾人は此の六者を統一したる一大信念を受持せざる可からず

今一度言を替ゆれば宗教は世間の學即ち政治、經濟、法律、醫學、道德、論理何れの學問とも一致せざる可からず否寧ろ此等の學問に對し常に啓發的ならざる可らずとて宗教心の調整を説少懋せられたり、時に十一時三十分頃也、此の少懋中首唱者南氏(主席郡書記天台宗)は來會者の依頼に依り講師に面悟し聽衆は法話の法味に滿腹して午餐を喫するを要せされば講師にして忍び得る限りは講題を遺憾なく演ぜられ度き旨を依頼せらる、弱十分の少懋の後、師は再び登壇し法華經の教義なる講題によりて十如是を説き壽量品の無有生死者退若出無在世及滅度者の語を引き靈魂の實在を證し人間乘開會の法義を説き未度者、令度未解者、令安者、令安未涅槃者、令得涅槃、今世後世如實知之なる經文を引證し且つ俗間經書治世語言資生業等亦順正法なる經文并に天台大師の深識世法即是佛法也妙樂大師の世間戒ありて第一義戒なきものは彩色に膠なきか如しなる語によりて佛道と世道との關係を説き人間乘開會の義を詳釋し即是國家教化の大方針にして他の余宗に有せざる法なる事を説き二乗作佛女人成佛等も亦法華經にのみ説かれたる事を説明し且又久遠實成は宗教の神髓にして法華經本門に至りて始めて之を顯示せられたる所以を演し午后一時御講演を終らせられたり

(六)講演中聽衆の態度 師の講演を開始せられたる頃は聽衆二百二十名斗りなりしが少懋前には約二百名余にして何れも地方に上流の地位を占むる人なるを以て或は二千三千の聽衆に勝れたる効果あらんか、聽衆の間は所謂水を打ちたる如く日冲天に赫々たる時しかも衆皆心理に一陳の清風を起し炎暑如燃の苦を忘却し一言一語も聞き洩さじと熱誠に傾聽せらる體たらく予も數次諸大家の講演を臨席傍聽したれども今日の如きは未だ會て見ざる所也

(七)偉大なる感動 講演少懋中南氏の法話の法味に滿腹したりとの讚美講演中聽衆の態度大暑を忘却したるは既に前記の如し講演後主唱者は予を通して師に次回御西下の際に日曜講演の爲に一日の日繰あらん事を記懸せられ度しと重ねて講演を依頼されたる如き、南、萬代(瀬戸銀行頭取天台宗)小山(不受不施派の大壇家)武用、谷中原(高等小學教師天台宗)諸氏等講演後師を本成寺に訪問し數時間疑義を質したる如き此等の諸氏并に聽衆の大數は顯本法華宗に對し一大嘆見を抱き居たりしも師の講演によりて警醒さる所ありたりとて予に對し數次盡力の勞を謝せらる如き先日迄は靈魂の存在を否認し如何に之を論ずるも物質的學說に眩惑したる予の親屬二人(一人は第一高等一人は第六高等の學生)并に青年の多數は靈魂の實在を否認したる愚を悟りたりとて盛に他の昨日の同論者に説明し居るか如き尙是等諸氏が予に依頼されたる次回の講題は各宗の所見と其比判なる主意なり是等諸氏は心理に何の期する所ありてか如是講題を撰ひたるや師が下種の佛因は果報を得る蓋し近きに在らん哉

(八)本多師の歸播

本多師は前記南、萬代、小山等他宗信者の質疑を説明したる后和氣發六時三十分の列車にて有志者歡呼の中に同信會和氣支部員吉岡熊太郎氏を隨ひ夏期講習會へ飛錫せられたり

如上之を要するに日曜講演會は本多師に依りて其の目的を地方人士に悉知せしめたり同信會和氣支部は本多師に依りて多數の有力なる同情者を得たり日曜講演當日の聽衆は本多師に依りて成就佛身の結縁を得たり嗚呼偉大なる本多大僧正の人格よ、嗚呼偉大なる釋尊の教義よ、嗚呼偉大なる正法の功德よ、南無妙法蓮華經 南無妙法蓮華經 南無妙法蓮華經

記者曰、顯本の光は百一號よりは本宗先師先哲の著書を掲載すべし 本月は記事の都合により講習會記事及和氣清風を以て之に充てたり讀者諒焉

祝統一百號歌

長尾 成島 般舟

妖僧出兮如竹葦。人迷權宗奈落聲。
堂々乎兮統一筆。總是獻身得脫情。
請看三五冲霄月。皎々拂雲佛勅明。

編輯局より

○本紙の發行期日に少なからぬ違を來したのは團長井村子の西下、山根、關田、古定等同人のはなしがたき法務、松尾子の手脚の不自由なる病氣などの事より、發行遅延申譯もない次第なれども日頃の御好意に依りておゆるしが願いたい
○兼て御投稿の榮を蒙つて居る諸氏にね願ひ申す、次來は可成法門の記事の御投稿が願いたい、硬い論文も宜しいけれども軟らかな法話を願いたい、諸師が日夜信徒に向つて爲て下さる優しい難有き信仰談を送つて戴きたい、之はお序に振かなを附けて下さい

○論文でも法門上に關係したものを歓迎します
○それから特に御依頼申す、顯本の光の欄に先師先徳の御著作を掲げることになりましたから、右御秘藏の諸君は著書は勿論消息文でも何でも未多く世に發表されて居ないものを騰寫して御送付が願いたい相應な筆料は出します、尙ほ御寄送諸君には紙上に、御謝辭申すことに致します

○之れは屢々頼むことですが、御投稿下さる原稿の文字を正格に判然と讀みやすく書て頂きたい、編輯員にも讀めず他に尋ねても讀めず、勿論之れが活判屋の方で讀めやう筈がない結局は不都合ながら怪しい文字搜入りの儘で済ますことがあります、之は大に注意をいのります

○投稿をして下さる諸君の中には随分と乱暴に反古だか何だか判らない位なのがある(原稿なれたのではなくて)こんなのは活字拾の大泣せ校正掛の大泣せ充分と困ります(活字拾曰くです(公徳に背きませうかと))

○器でよろし、何卒一行二十七字詰になして下さい

○同人相よりて之はとうも云ふはと雖も原稿(文章の善悪の意味ではないので)文字が解りにくい類(は遺憾千萬ながら没書にするかもしれません)

廣告

来る九月十二日午後二時より勝田郡勝間田村舊勝間田尋常小學校舎内に於て作東統一讀者會並ニ宗教研究會を開き度條万障御繰合御來會を乞ふ尙ほ統一讀者以外と雖も廣く傍聴を許す筈なれば宗教に關し志のある人々へは讀者諸君より御誘ひ可被下成多數御來會あらんことを奉希候同日出席せらる講師は左の如し

- 能 仁 事 一 師
- 原 田 容 廣 師
- 山 名 木 信 師

明治三十六年八月十一日

統一雜誌讀者會幹事

岡 山 吳 服 商 柿 屋 本 店 主 店 久 城 茂 太 郎 話 二 六 〇 番 電 話			
柿屋 洋傘 店 (岡山市上之町)	柿屋 太物店 (電話二六〇番) (岡山市上之町)	柿屋 南店 (電話二五五番) (岡山市上之町)	柿屋 北店 (電話一五八番) (岡山市車町筋)

御 雛 附 ぞ 小 道 具	武 者 東 人 羽 子 形 板	久月本店 中原 福藏 (電話本局二千三百八十二番)
---------------------------------	--------------------------------------	---------------------------------

御注文に依り調製致候
 東京日本橋通り十軒店

日本之柱 主筆佐野貫孝 毎月十五日發行 一部金五錢 一年分前金五十錢 發行所 大坂市東區中寺町 立正社	教友雜誌 主筆武田宜明 毎月二回發行 一部金五錢 一年分金壹圓廿錢 發行所 甲府市稻門村 教友社	北友雜誌 主筆松森靈運 毎月十八日發行 行一部金五錢 一年分金六十錢 發行所 東京市小石川區白山大乘寺内 北友雜誌社施本部	輪王 主筆川合妙鏡 毎月十五日發行 一部金一錢 一年分金十二錢 編輯阿倍正尹 當分毎月一回發行 行一部金四錢五厘 一年分金五十四 發行所 岡山市野田屋町四八番 ひろめ發行部	日宗新報 主筆加藤文雅 每週月曜發行 一部金五錢 一年分金壹圓半錢 發行所 東京府荏原郡池上村 日宗新報社	妙宗 主筆田中智學 毎月六日發行 一部金十錢 郵稅壹錢 發行所 相模國鎌倉嬰山 師子王文庫
---	--	---	--	---	---

統一

佛旗六金色調進所 六金色價表
御寺院御幕 唐縮緬製

種形別	並品製	上品製	新友仙	本友仙	染抜
在家用	廿二錢	廿八錢	卅五錢	五十五錢	
寺院用	四十三錢	五十錢	〇	一圓三十錢	
同極大	七十五錢	八十八錢	〇	二圓二十錢	

右外別大特大最大數種 ● 國旗本友仙染抜四十五錢
御寺院御幕 ● 唐縮緬紫幕 ● 天竺木綿及五郎丸白幕

京都市油小路魚棚南 吳服商 高橋正意
御木山御用調進所 電話(二千二百八十七番)

團告

一金壹圓也 東京市牛込原町久成寺住職 田井 日晃殿
一金貳圓五十錢 東京市淺草區榮久町十番地 涌井吉太郎殿
右本誌基本金の中へ御寄附相成正に領収候也
八月二十五日

御斷り

統一團

記事の都合に依り特に本號限り廿五日發行とし次號よりは從前の通り十五日に發行可仕候

統一編輯部

一本誌代金不納の諸君は至急御送金ヲ乞
一雜誌交換、寄稿共移轉先へ願升

一本誌は毎月一回十五日を以て發行期日とす
一本誌は一冊八錢十二冊前金八十六錢廿四冊前金一圓七十錢郵券代用は一割増但五厘切手を其とす
一諸讀申込の節は住所姓名を附書にて認めらるべし
一爲替局は淺草區北松山町として御振込の事
一本誌は別に領收書を發せず但し領收證を要する向は返信料を封入すべし或は爲替振込の節携渡濟通知料貳錢を振出郵便局へ納付すべし
一廣告料は五錢活字廿七字詰每一行金八錢なり

明治卅六年八月廿五日印刷發行

發行人 井村恂也
編輯人 山根顯道
印刷所 鈴木暉學
北澤活版所

發行所

東京市淺草區南松山町四十五番地

統一團

(明治三十年二月廿四日 第三編部更訂部)
(明治三十年二月廿四日 第三編部更訂部)
(明治三十年九月廿五日發行統一第一號 每月一回十五日)

○信仰と道德の調和

▲如來の福音 今成乾隨

○大なる戦信

▲專門講習會拾談 紀野慶康

○日什大正師傳

▲盛岡通信 日什大正

○秋の詩

▲初秋のまなざしと目録 教文會編

○續談諸録

▲各地報告 影山謙二

○公徳を教ふるは獨我宗のみ

▲廣告 常樂院日録

○本勝達劣假名書

常樂院日録